BRAVE HISTORY—勇なる物語—

揺れる天秤

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歴史の終わりに、二つの希望が世界へと放たれた。

『希望』は数多の世界をめぐり、多くの戦友（とも）と契りを交わし、来る決戦へと向かって歩き出す。

自分達が討つべきものとの闘いへと――

目次

第０話　終わる世界、つなぐ希望 ―― 1
第一章　乃木若葉は勇者である（前）
第１話　拾われた勇者 ―― 3
第２話　四国への道中 ―― 10
第３話　四国の勇者 ―― 16
第４話　若葉ＶＳ奏 ―― 22
第５話　勝手気ままな精霊 ―― 28
第６話　郡千景 ―― 33
第７話　模擬戦 ―― 40
第８話　走るもの ―― 46
第９話　病室の約束 ―― 52
第１０話　力を合わせるために ―― 59
第１１話　第二次四国侵攻 ―― 65
第１２話　空から落ちるもの ―― 71
第１３話　紋章術 ―― 77
第１４話　未来行きの準備―ｐａｒｔ．１― ―― 83
第１５話　未来行きの準備―ｐａｒｔ．２― ―― 90
第二章　結城友奈は勇者である
第１６話　引き寄せられた時代 ―― 97
第１７話　死せることなき命（たましい） ―― 102
第１８話　合流 ―― 108

第０話　終わる世界、つなぐ希望

そこは、幾度も世界の終わりを迎えた場所。
一人の女性が二つの巨大な試験管の表面を撫でる。
「また、世界は終わりへと到達してしまったわね…。越えるべき年度を、今回も越えられなかった…」
女性は傍らの機械に手を伸ばす。パソコンのようなキーを軽快に叩きながら――
「とはいえ、私もこのまま諦められるほど『神様』相手に従順ではないのよ。きっとどこかに『神様』を倒す世界があると私は信じているわ」
試験管の中には男女が一人ずつ。身体にいくつもの管が繋がれていて、目は閉じられている。
「本当なら私が世界を渡りたいのだけど、私にはその素養はなかった。けれど、貴方達にはその素養が備わっていたわ。ただ死ぬだけよりは他の世界へと渡って人類が到達するはずの『未来』へ、その足を歩いていってはくれないかしら？」
試験管の二人は応えない。口元から気泡がわずかに漏れるだけ。
女性が見ていたモニターに『工程完了』の文字が表示される。次いで時間が表示された。『あと３００秒』
「さて、貴方達ならきっと今度こそ『神様』を討ってくれると願うわ。私の古い古い、本当に古い勇者様はあの『神様』を追い払った本当の勇者様なのだし。貴方達にはその血が流れている。だから――きっと大丈夫」
別に備え付けられたモニターからアラートが鳴り響く。女性は一瞥するもすぐに視線を試験管に戻した。
「あら、さすがは『神様』。ようやく気がついたようね。まあ、もう遅いのだけれど…。じゃあ、ね。二人共。私の大切な――娘と息子…」
試験管が強く輝いたかと思うと試験管の中にいた二人の姿は消えていた。
遅れて女性の後方にあった扉が吹き飛び、異形が姿を現す。それは蠍のような尾を持ち、蜻蛉のようにも見え、無機質な天秤のようにも

見え――到底生物には見えない異形だった。
「残念でした。私の小さな賭けは間に合ったわ。はは、アハハハハハ！『神様』！お前達に私達は絶対に屈しないわ！それは今も昔も変わらないわ！いつかきっと、あの二人がお前達を討ってくれる！私はそれを信じてる！」
　異形はゆっくりと巨塊にしか見えない腕を振り上げる。
「私には素養はなかったわ。でも、あの子達がきっと神討を成すわ！だって、あの子達は――『勇者』なのだから！」
　異形の腕が女性へと振り下ろされ――
　――そうして、一つの世界は終わりを告げた。

☆

　そこは、何も無いような世界に見えた。そこには一組の男女が浮いていた。
「いよいよ、か」
「お母、さん…」
「泣くな。これから俺達が行く場所は一緒とは限らない。でも、きっと会おう。時間軸がずれることは無いはずだ」
「…うん。時間って、どこに出るんだっけ？」
「西暦の終焉の年から少し前。ただし、幾多の世界の原点（オリジン）。幾多の可能性がある世界」
「うん…。じゃあ、きっとまた会おう、兄さん」
「ああ。今度こそ、みんなで神を討つぞ」
　二人の視界が白く染まる。そして、二人はそこへとたどり着く。
　――全ての可能性が交差する、原点の世界樹（オリジナリティ・ワールド）へと――

第一章　乃木若葉は勇者である（前）

第1話　拾われた勇者

目を開けて最初に見えたのは木の天井だった。
「…さて、私は今、どこにいるんでしょうか？」
身体を起こすとそこはどうやらどこかしらの御堂かなにかの中のようだ。扉のような場所は開いており、外からの光が入ってきている。
「とりあえず、外に出ましょう」
外に出ると光に目をすがめる。光に目が慣れるとそこは高台のような場所らしく、階段を下っていく先に湖のようなものが見えている。
「うーんと…。聞こえますか？」
声をかけると何も居ないはずの空間から返事が返ってきた。
『どうかしたか、零花』
「あっ、ちゃんと返事ができるんですね、ゼロ」
『…うむ。この世界は神気に溢れている。ここにあればそのうち姿見も取れるようになるだろう』
「本当？ということは転移は間違いなく成功したってことだね」
『ああ。だが、それにしては妙に静かすぎる。何か起きておるのかもしれん』
「うーんと…。ゼロ、『勇者システム』は使える？」
『ああ。問題なく機能しよう。『位相システム』はエネルギーが足りんがな』
「いきなり使わないよ、あんな物騒なもの」
『だがな。あれを使わねば他の可能性にアクセスできん』
「うん、わかってる。でも、使用承認には兄さんもいないといけないし」
『確かに。やつはどこだ？』
周囲を見渡したり御堂の中を見返すが他に人の姿は見受けられな

い。
「予想通り、別の場所に出ちゃったみたい」
『まあ、予定していた時間軸には二ヶ所に勇者がいたはずだからな。仕方あるまい』
「うん。兄さんならきっとなんとかするでしょう」
『さて、こうしていては埒があかん。確かにここには神気があるが、こうして分けてもらうばかりでは私自身申し訳ない』
　先ほどからゼロに向かって光の粒子のようなものが神像から流れているようだが、どうやら大社の大神から神気が流れ込んできているらしい。
「だねぇ。とりあえず勇者か巫女を探そっか」
　御堂から出ると階段を下りだす。しかし、数段下りないうちに下から誰かが駆け上がってきた。
「うん？」
「えっ!?」
　巫女服を着ている少女はこちらを見やると足を止めた。
「貴女は…いったい…」
『ほう？この娘、私の力を関知しておるようだ』
「えっ？そうなの？」
『うむ。となれば、こやつは勇者の巫女であるのだろうが…』

　目の前の巫女を見ようと視線を下げた向こう側に何かが見えた。視線を落とさずにそちらへと視線を向ける。
「あれは――」
『ふむ、なるほど。侵攻中であったか』
「ゼロ」
『わかっておる。とはいえ、目の前の相手も忘れずにな』
「えっ？ああ…」
　巫女も自分の見ていたものへと目を向けていた。手を組み合わせて祈っているようにも見えた。
　その巫女の肩を叩いて、その者――結城（ゆうき）零花（れいか）は笑いかけた。

「大丈夫だよ。このために私はここに来たんだろうし」
「えっ？あの、貴女は…」
「私は結城　零花。貴女にわかりやすく伝えるなら――勇者だね。いくよ、ゼロ」
『さて、誰を受けるべきか…』
　零花は身体を縮めてバネのような跳躍を持って空中へと身体を飛ばす。
「うーんと、大天狗でいこっか」
『転移後いきなりの全力は大丈夫か？』
「平気だよ。身体の許すかぎりは全開で暴れよう。あれは――『敵』なんだから」
『――よかろう。示してみせろ、零花』
「うん。『開花』！」
　零花の身体を一瞬、光が包む。光が晴れるとそこには勇者服を身にまとい、腰に刀を差した姿で現れた。
「全力でいくよ！『満開（しんかい）・昇華』！」
　再び光が零花を包む。光の中から割るように翼が姿を現し、その姿はお伽噺に出てくる天狗のような服に身を変え、背中に現れた翼を羽ばたかせてその場所へと飛翔していく。
　湖の近くまで来るとその異形は明らかに大きかった。都心のビルくらいはありそうな巨体から何かを撃ち出している。
　撃ち出している先には全身を血で染めながらも闘志を捨てずに立ち向かう少女がいた。
「助けるよ、ゼロ」
『大太刀だが、大事ないか？』
「問題なし」
　腰から刀を抜く。が、それは鞘から抜かれていくと到底鞘には収まらない刃渡りをしていた。
「さあ…、退け。頂点（バーテック）に座（ク）すものよ（ス）！」
　翼で空を打ち、零花は疾風のごとき速さで得物を振るう。集まってきた白い蟲のような物体をただ一振で幾体も両断していく。

「――」
「うん？」
　大空を駆けながら敵を薙ぎ払っているうちに地上にいた勇者が何かを叫んでいる。
「ゼロ、聞き取れる？」
『本体を斬らないかぎりは際限なく湧くようだ。あの大型をどうにかする必要がある』
「了解！」
　空中で体勢を立て直し、大太刀を上段に構える。
「火の位。一刀両断！」
　身体を前に倒す、ただその一動作でトップスピードに乗る。相手が狙い撃ってきたものすら捩じ伏せて――その一刀を振り抜く。
「――どう？」
『…うむ。核を破壊できたようだ。崩壊していく』
　巨体が崩れていくのを横目に、零花は地上へと降り立つ。そこへ、先ほどの勇者が駆け寄ってきた。
「君は、いったい…」
「はじめまして。私は結城　零花といいます。つかぬことをお聞きしますが、貴女は白鳥　歌野さん、で間違いないでしょうか」
「えっ、そうだけど？」
「よし。きちんと来れていたようでなにより。まずは諏訪の大社まで下がりましょう。話はそこで致します」
「…うん。わかった」
　傷だらけの歌野を抱えて階段を上り、大社が見えてきたところで先ほどの巫女が駆けてきた。
「歌野！」
「みーちゃん、無事だったようだね！」
「歌野の方は大丈夫なの!?」
　歌野の身体は全身切り傷だらけで端からみれば血塗れなのだ。
「えっ、ああ、うん。全身傷だらけでどこが痛いかすらわからないくらい痛いけど…生きてるから」

「うん。…うん」
「さて、とりあえずみーちゃんに手当てを任せるとして――貴女のこと、聞かせてもらえる？ここ、長野に他に勇者がいたというのは聞いたことないけど」
「はい。説明致しますが、まずはそちらの手当てを優先しましょう。私と、ゼロの説明はいろいろと複雑なので…」
　大社の中で傷を手当てしながら零花は自分という存在、ゼロのことを説明する。歌野とみーちゃんこと藤森　水都は口を開けて聞いていた。
「――これが、私という存在の全容になります」
「遠い、本当に遠い勇者の末裔、ってことか」
「でも、どうやって…」
「まあ、いろいろと制約はあるのですけど私達の時代には過去遡行――いわゆるタイムトラベルが可能な技術がありました」
「へえー、いいね。好きな過去に行けたりするの？」
「…いいえ。基本的には多大なエネルギーの起こる時間――今のような動乱の時代にしか飛べません」
「なるほど。あまり便利なものでもなさそうだね」
「しかし、神様…ですか」
　水都の視線の先にはゼロが鎮座している。
『この姿が気になるか？』
「ああ、いえ…。私自身、この諏訪の神様に選ばれて巫女をしていますから、神様にはいろいろと思うところもありまして…」
『なるほどな。だが、その諏訪ももう長くはもちそうにないな。先ほどから大社の神像より我に力が流れてきている』
「えっ!?」
『…ふむ。心得た』
　しばらく神像の方を眺めていたゼロは軽く頷くと二人へと向き直る。
『諏訪の大神より力の全権及び其方（そなた）らを頼まれた。このまま諏訪の大地と共することも汝らは思うておるのかもしれぬが、神同士の約定

だ。申し訳ないが其方らを死なせるわけにはいかなくなった』
「それは…、私達としてはありがたい話だけど…。えーと、転移ってのでどこかしらの世界に飛ぶの？」
『否。そうできればよいが『位相システム』の起動には零花以外にももう一人の承認がいる。まずはそちらと合流する必要がある』
「居場所はわかっているんですか？」
「はい。この世界において、勇者が現存する場所は諏訪ともう一つしかありませんから」
「なるほどね。四国、か。さっきお別れの連絡を入れたところなんだけどなぁ…」
　苦笑いしながら頭をかく歌野に水都も苦笑で応える。
「まあ、死んだはずの人が生きて姿を現せば相手も喜ぶのでは？」
「まあ、確かに。乃木さんとの論争にも答えは出せなかったことを考えればこれは僥倖ね」
「もう…、歌野ったら…。あの、よろしくお願いします」
　水都が歌野と頭を下げる。が、ゼロはそれを嫌がるように首を横に振った。
『頭など下げてくれるな。我々としても其方らをどうやって説得するか悩んでおったところなのだ。問題なくついてきてくれるというのであれば、是こそすれ否などとは申さぬ』
「むしろこちらこそありがとう。簡単なことではないと思っていましたから」
　一人と一柱の返事に二人は頭を上げる。
「だって、二人がいないと私達はここで奴等に負けるしかないわけでしょ？だったらついていって力をつけることもありじゃないかな、ってね」
「少なくとも諏訪の大神からもついていくようにさっき神託が下りましたから。私達にはついていった方が多くのメリットがあります」
『ならば、よいのだが…』
「なんていうか、ゼロ様って神様らしい威厳って無いね？」
「こら、歌野！」

歌野の頭をはたく水都にゼロは苦笑する。
『よいよい。我に大神と同じ格を持てと言われても我が困るところだ。そもそも、零花と我は別物に見えるがその実は二心同体という状態だ。零花が居らねば我は存在が叶わぬ。故に、土地に根ざし、人に力を与えてきた国津神達とは根本的に存在が違うのだ』
「それは、どういう…」
「表し方は歴史によっても言葉が違うから一概にはいえませんけど、いわゆる半神、半分が人間で半分が神様の存在を言います。神様が人々に密接に関わる時代には幾分か居たらしいですけど。日本でわかりやすいのは天皇がその神様、天津神の血族とは言われていたとは見たことはあります」
「ふぅん。でも、そういったお話は今はいいや」
歌野が立ち上がる。二人と一柱から見上げられると――
「今はとにもかくにも四国へ向かいましょうよ。行くべきところは決まっているのなら、行動あるのみよ！」
「…うん。そうですね」
水都と零花も立ち上がる。零花の肩にゼロが駆け上がってきた。
『道中に寺社仏閣があれば可能な限り寄ってもらいたい。残っているとは思わぬが、できうるかぎりの神気を回収しておきたい。この時代の神気はとても心地よい』
「オッケー。じゃあ、簡単な旅支度したら、向かいましょうか、四国！」
こうして、零花は歌野と水都を連れて四国へと向かい始めた。

第2話　四国への道中

あれから1日経って。長野から出た三人と一柱はまずは大阪を目指していた。
「まあ、単純に四国へと渡るならこっちからだと近い大都市は大阪だったってだけなんだけど」
「急にどうしたの、うたのん？」
「いや別に。何かあったわけじゃないんだけど」
「そういえば、零花さんの使っていたのは勇者の力なんですか？」
「はい。そうですよ。未来のシステムで組まれた事実上の最新鋭型の『勇者システム』になります」
　零花が懐から取り出したのはスマートフォンに見える端末だった。画面には虹色に輝く樹木が映っている。
「『勇者システム』の基幹は調べてみたんですけど、どうやらこの時代に存在しているらしいんです。とはいえ、私が使うシステムとこの世界に残るシステムは別物かもしれませんけど」
「というと？」
「私の『勇者システム』はあくまでもゼロの力を減産させることなく運用するためのものなんです。たぶんですけど、歌野さんに使っていただくとなると兄さんのシステムを流用した方が扱いやすくはあると思うんです」
「そういえば、長野を出る時にも『兄さん』の話題が出ていたけど…」
「はい。私の兄さん――御剣（みつるぎ）　奏（かなで）の『勇者システム』は現存していたシステムの発展型ですから、歌野さんに使っていただくにはこちらのシステムの方がいいと判断します」
「そのお兄さんは四国にいるの？」
「たぶん、ですけど」
『『位相システム』の影響がきちんと作用しておれば、な。『位相システム』とは我々が向かう予定の時代の動乱の中心部へと誘われるようになっている。この時代のように動乱の中心部は複数ある時もある。そういった際にきちんとシステムが作用しているのかは、今回の転移

によって確定すると判断している』
「ややこしいね、いろいろと」
「っ、うたのん、零花さん、ストップ」
　水都の声に会話を止めて足を止める。岩陰から大通りとなる道をのぞき込む水都に、歌野と零花はつられてのぞく。
　大通りにはいくつかの白い物体が左右を見回している。何か探しているようにも見えるのだが、さりとて自分達を探しているようにも見えない。いや、あれらの思考は読めないので実際のところはわからないのだが。
「…あんなところで固まって何してるんだろうね」
「ねえ、零花さん。その、そちらの世界ではバーテックスってあんな風にしていることってありましたか？」
「あるにはあった、かな。ただ…、うーんと、あの程度の数がたむろっているのも珍しいんだよね」
　見えているのは４～５体。基本的にあの白いやつは数に任せてこちらを押し潰す勢いで動くのがほとんどだ。
　あのように少数が見渡しの利く場所にいるというのはなかなか無い。
「私達の時代だとあの白いのって基本的に最低限数十～数百の単位で都市そのものを襲来する…まあ、言い方は悪いけど蝗害のイナゴみたいな感じで…」
「ああ、イメージしやすいかも。言われてみると確かに変、か」
「どうしよう？ここを行くのがいいとは思うのだけど」
「うーんと、今はあまりやり合いたくないんだよね。《大天狗》使っちゃった後だし」
「あの時の？」
「うん。ゼロとの全力はノーリスクで使えるようなものじゃないから。精霊との《一体化》程度なら一回、二回使った程度でどうにかなることもないんだけど…」
『とはいえだ。短期間で連続使用には耐えれぬ。あの数であれば通常の出力である『開花』でなんとかなるが、数が増えてしまえばそうも

いってられなくなるやもしれん』
「それに、歌野さんも戦える状況じゃないし…」
「まあ、そうだね」
　歌野は昨日の戦いで身体中ボロボロだ。ゼロの診断では肋骨にもヒビが入っているらしい。
　本来なら諏訪でしばらく療養してからの方がいいのだが、諏訪の結界、大神達が限界に近かったためにやむなく諏訪を出立している状況なのだ。無用な戦闘はしないに越したことはない。
「しばらく様子見して動かないようなら別のルートを考えましょう。歌野さんに無理させるわけにもいきません」
「ありがとうね、零花」
「気にしないでください」
　ひとまず腰を落ちつける場所を見つけて座る。こちらからはバーテックスを確認できるが、向こうからは回り込まないと見えない場所が見つかった。
『しかし、あの個体はなぜあそこから動かぬのだ。近くに動物の類も居らぬはずだが…』
「バーテックスがああして動かないことって珍しいはずなんだよね。何かしら追いかけているものがあるならわかるんですけど…」
　周辺を見渡すものの特別バーテックスの興味の引くようなものは見当たらない。しかし、現に当のバーテックスの末端個体は大通りから動く気配を見せていない。
「まさか、見張りとかなんじゃ…」
「バーテックスにそこまでの知能は無いと思うけど」
「あっ、動いた」
　バーテックスは浮かび上がると青空の下、見えなくなった。先ほどまで居た場所を見て――――歌野は眉を潜め、水都は目を逸らした。
　動かなかった理由は明白にあった。バラバラになって、パーツの欠損した屍。おそらくどこかしらに生き残りがいたのだろう。
「襲われた、みたいですね」
「これだけ荒廃した場所でも生き残りは居たんだね。気づいていれ

ば、無理をしてでも奴等を――」
「歌野さん。無理は駄目です。気づけていたとしても彼等を助けることは不可能だったでしょう」
少なくとも自分達が来た頃にはすでにバーテックスはあそこから動いていなかった。悲鳴も聞こえなかった以上、襲われたのはもっと前だったはず。
あの場で助けに入ったところで結果は変わっていなかったはずだ。
「にしても…。この時代のことは私達の未来には未曾有の大災害として伝わっていたけれど…。これほど酷い事態だったなんて…」
「未来の、零花が産まれた頃はどうなってたの？」
「私が半神となった頃には大地として残っていたのは北欧の一部と日本の四国の二県、あとはアメリカのハワイ諸島辺りだけだったって聞いてます」
「えっ…？たったそれだけ…？」
「はい。うーんと、私の知っているかぎりの知識として…日本は神様からの力を借りる方法が失われて久しく、古来より神を討つ者――『勇者』たる存在にたどり着くまでに数年。この期間で四国・九州の一部を除く本土のほぼ全域を喪失したと聞いています」
「勇者に、たどり着く？」
「はい。『勇者』たる人物の選定やその方法などのあらゆる情報は失われていたんです。一説には『大赦』と呼ばれる組織が管理していたと記述こそ残ってはいても、『大赦』がどうなったのか、元々はどこにあったのかなどが散逸していたんです」
どうやら遠い未来では『勇者システム』そのものは失われた遺物だったらしい。零花が使えている以上、何らかの方法によってサルベージはされたのだろうが…
「大変な時代があるんだね…」
「まあ、この時代から見ると軽く千年は先の未来なんですけどね」
『お前達、話はそれくらいにしておくといい。先ほどのバーテックス、どこかしらに飛んでいきおったようだ。今ならば安全に抜けられるだろう』

いつの間にか見張り役をしていたゼロが、先ほどのバーテックスが空高くへと消えていくのを見ていた。
「さて、じゃあ日が落ちるまでは頑張りますか！」
「そうですね。行こう、ゼロ」
『うむ』
三人と一柱は再び街中を歩いていく――

★

時間は少し戻り、場所は四国・丸亀城――の屋根の上。
「…とりあえず、転移は成功したとみるべきか」
一人の青年が屋根に寝転がっていた。身体を起こし、眼下の景色を眺めていたが――不意に風が止まる。
「なるほど。これが『大赦』に残されていた情報にあった『樹海化』か」
景色は一瞬のうちに木の根が絡みつくような空間へと変わり、少し先には五人の人影が見えている。
「そして――彼女達がこの四国を守護している『勇者』というわけか」
距離があるためか何を話しているかまでは聞こえない。しかし、なにやら言い争いをしているようで――
（大丈夫なのか、アレ…）
様子を見ていたが一人の勇者が見えつつあったバーテックスの群れへと跳んでいく。遅れて二人が先行した勇者へと続き、残りの二人も少し躊躇している様子が見えていたが、すぐに戦線へと飛び込んでいった。
「すごいな…。これが、歴戦名高き四国の勇者、か…」
青年は腰に付けているポーチから何かを取り出した。それは虹色に輝く石。そして、青年の肩辺りに小さな何かが姿を現した。
「…ありがとう。力を貸してくれるんだな？」
『――』
それは三つの足を持つ烏。肩に着地して翼を広げて遠目に見えて

いるバーテックスを威嚇しているようだ。
「――行こうか。力を、貸してくれ」
『――』
烏が嘶(いなな)く。青年の手の中で石が砕け散り、虹色の光が青年と烏を包み込む。
卵のようになった光は弾け飛ぶと、漆黒の巫女服をまとい、烏の翼をはばたかせて《ソレ》は空を駆ける。
戦場を縦横無尽に戦っていた勇者達は大型のバーテックスを前に動きを止めていた。だが、そこを漆黒の《ソレ》が切り裂く。
「なんだ!?」
下にいた勇者の一人が声をあげたのが聞こえるが《ソレ》は無視して目の前のバーテックスと対峙する。
「――黒刃」
《ソレ》は手に漆黒の刀を握る。バーテックスは羽根のようなもので《ソレ》を圧し潰そうと――
「――斬羽」
――幾度振るわれたかはわからない。《ソレ》は残心を取り、大型のバーテックスが崩れ去るのを背に、ゆるりと五人の勇者へと向き直る。
勇者達は突然の存在に構えを解こうとはしていない。警戒を最大限にしていた勇者達の前に《ソレ》は着地すると、光を発して――先ほどの青年と烏が姿を現した。
「はじめまして、四国の勇者。俺は、御剣(みつるぎ)奏(かなで)。貴女達が護り抜いたこの世界に産まれる――遠い未来の末裔です」

第3話　四国の勇者

――バーテックスの防衛から一日が経過して…。

丸亀城の一室。勇者達の教室に勇者五人と巫女が一人。そして、昨日の青年と烏がいた。

「さて、まずは改めて自己紹介を。俺は御剣　奏。信じられない話をしますが、この時代から約千年くらい先から来た、未来の人間です」

五人は疑り深く青年を見ていたが、巫女の少女だけはため息をついていた。

「つまり、貴方が『存在しない一』という人、ですか」

「…どういう意味だ？」

「昨日、樹海化が解除されてすぐに神託が下りました。『神を従える者が現れた。彼の者とは敵対するな。彼の者は『存在しない一』であり、今の者達が束になっても相手にならない。我々にも干渉できない』と」

「神様から御墨付きをもらえるとは光栄だね」

「…というわけです、若葉ちゃん。彼は敵ではありませんし、進んで敵対するわけにはいかない相手になります」

「そうか。…まあ、昨日は助けてもらった立場だしな」

勇者の五人のうち一人が立ち上がる。

「私は乃木（のぎ）　若葉（わかば）だ。一応、この四国の勇者のリーダー役（仮）に就任している」

隣に座っていた一人が勢いよく立ち上がった。

「私は高嶋（たかしま）　友奈（ゆうな）！特技は、格闘技！」

その場で型を披露してくれる隣から――

「…郡（こおり）　千景（ちかげ）よ」

静かな声が響いた。すると若葉から見て友奈とは反対側に座っていた一人が立ち上がる。

「タマは土居（どい）　球子（たまこ）だ！だが、お前は気安く『タマ』と呼ぶのは許さないからな！」

その隣で静かにこちらを見ていた最後の一人――

「私は伊予島（いよじま）　杏（あんず）です。昨日は、ありがとうございました」
　そして、奏の隣から若葉への隣へと並ぶように歩いていった――
「そして、私は上里（うえさと）　ひなた（ひなた）といいます。昨日の戦い、皆さんの助力には感謝します」
　全員の自己紹介を聞いていた奏はウンウンと頷き。
「よろしく『四国の勇者』。いやぁ、しかし《天火の戦人（てんかのいくさびと）》、《鬼神の担い手（きしんのにない）》、《七影の闇者（しちかげのあんじゃ）》に《絶対の守護者（ぜったいのしゅごしゃ）》と《智啓の参謀（ちけいのさんぼう）》か。まさか御目にかかれるとは思ってもみなかった。そして――《始まりの巫女（はじまりのみこ）》にも」
　ズラズラと並べられた二つ名にその場にいた全員が固まる。ギギギギギ…と油の切れた人形の首のように若葉の顔がこちらを見ていた。
「な、なんだろうか。今の呼び名は…」
「うん？俺の時代に残っていた『大赦』と呼ばれる組織のデータベースからサルベージされた当時の四国の勇者について書かれていた報告書？…のようなものに書かれていた名だ」
　実は正確には報告書ではなく何者かの日記の一部であることは判明しているのだが、奏はその辺りについては知らない。
「…で、できれば名前で呼んでもらえると…」
「うん？ああ、大丈夫だ。二つ名など呼ばれた日には悶え苦しむハメになるのは身に沁みている。ただ、感慨深かったから、つい―な…」
　深々と頷く奏を横目に若葉達は顔をつき合わせる。
「なんとかしてあの二つ名を葬れないだろうか」
「えー？カッコいいよ？」
「…高嶋さんが良いなら私は構わないけど」
「二つ名。良いよなぁ！あの中から選ぶにタマは《絶対の守護者》か。いい響きだな！」
「…でも、できればどうにかしたい、ですね」
「…一応それとなく大社の方に話を通してみますね」
「頼んだ、ひなた」
「おーい。密談は俺のいないところでやった方がよくないか？いや、

ほとんど聞こえなかったんだけどさ…」
　それぞれの席に戻ると奏は教卓に腰を下ろす。
「さて、まずは俺がどうしてこの時代に来たのかを説明した方がいいわけだよな？」
「そう、だな。私達にも関係してくるのであれば聞いておくべきだろうな」
「ああ、最終的には大きく関わってもらう予定、なんだが…。まずはちょっと歴史のお勉強だ」
　教卓から下りると黒板に年代表を書き始める。
「まずは今の時代。『西暦』という時代の終焉。世界が神々によって理（ことわり）から崩壊させられるところから――」
　黒板に描かれるは『西暦２０１８年』
「正直な話をすると、俺達の時代から見てこの時代の情報は実は断片的にしか残っていなかった」
「なぜだ？」
「わからない。ただ、大赦と呼ばれる組織のデータベースからわかっているのはこの年にバーテックスが本格的に動き、７月の末に諏訪が陥落。諏訪の巫女・藤森水都と諏訪の勇者・白鳥歌野は戦死したと伝わっている」
　奏の言葉にひなた達に驚きが広がる。若葉だけはきつく目を閉じているから知っていたのだろう。
「まあ、そちらは手を打ってあるしあいつならなんとでもするだろ。最悪、ゼロもいるしな」
「――えっ」
　今度は若葉だけが驚いている。
「詳しいことは言えないがな。ただ、俺達だって過去に来るのに当時の情勢を知らないまま来るわけにもいかなかった。だから、できるだけの手は打ったさ」
　そう。二手に分かれるのは当初の予定通り。唯一読みきれていなかった出現場所の賭けにも勝った。二人なら必ず救えるだろう。
「俺達がこの時代でわかっているのは――勇者の生き残りは四国だけ

ということだ。あと、その生き残りも一人だけだったらしいけど、その辺りの情報は当時の時点で廃棄されたか抹消された可能性が高いという話だ」
「ま、待ってください！一人だけって…」
「それも定かじゃないって。残ってる情報からわかるのは『人類は辛勝したかわりに四国以外を失った』ということぐらいだった。その後、時代は『神世紀』という時代に移行することはわかっている」
「…というか、四国以外を失ったって何が起きるんだ？少なくとも今は本州とか見えてるぞ」
　球子の言葉に奏は窓に視線を移す。海を隔てた先にわずかに陸地が見えているが、あれが日本本州なのだろう。
「さあなぁ。どういう経緯を踏んだら四国以外が失くなるのかわからないが、相手は神様だ。わりとなんでもありな存在だからな」
「うーん…」
　腕を組んで唸る球子を尻目に黒板には『神世紀』を書く。
「『神世紀』…この年代の初期から中期にかけては四国の平和な情勢を語るものが遺されていた。なんだかんだとこの歴史は三百年ほど続いたようだ。そして、神世紀３００年に六人の勇者の力によって神の干渉を退けて人類は世界を取り返したらしい」
「３００年か…。途方もない話だな…」
「――で、貴方はそこから更に千年は先の未来から来ているんですよね？」
「ああ。問題はここからだ。神世紀以後の歴史は明確には残っていなかった。理由は不明。ただ、わかっていることは――――『天より降りたる神』は神世紀の以後は現れてはいないということ。『勇者』の力は俺達の時代へ進むまでの間のどこかしらで失われたということ」
　奏の書いた年表を見ていた勇者達は各々意見を交わしている。そして、不意に千景が手をあげる。
「それで、結局のところ貴方は私達に何を望むの？」
「ああ、それなんだが…。たぶん、どこかのタイミングで身内がここに

合流する手筈になっているんだ。それ以後に正確な話をすることになるとは思うが…」
奏は一息つく。
「――俺達とともに時間旅行についてきてほしい。そして――『カミサマ』を討つ手伝いをしてほしい」

☆

奏が居なくなった教室で若葉達は話し合っていた。
「…どう考える」
「タマ達があいつの話を信じるかどうかってことか？」
「それもあるが…。ついていくのか、ということだ。おそらくだが、あいつはいくつか重要な話をせずにいる」
「そうだね。そもそもどうやってつれていくのかも言わなかったし」
「ええ。今の状態ではどうとも言えないわ。乃木さんだってそう思ってるから私達に聞いているんでしょう？」
「ああ。だが、早晩答えは出しておくべきだ――が、正直なところ私もなんと言えばいいのかわからない」
全員が考える体勢に入ってしまう。しばらく黙っていたが…。
「とりあえず、今は保留しませんか？」
「ひなた…」
軽く手をあげたひなたの方へと全員の視線が集まる。
「彼の話では後から合流する予定の方がいるという話ですし、それまでは彼にも戦っていただいて判断するというのはどうでしょうか。昨日の状況を見るかぎり、彼も『勇者のような力』を使えるようですし」
「…皆はどう思う？」
全員からは特に反論もない。
「わかった。とりあえずは保留して、しばらくは彼にも戦いに出てもらおう。彼のいう『身内』が合流してから改めて話を聞き、その上で答えを出そう」

それぞれに頷きあって1つの答えを出した『勇者』はそれぞれに教室から出ていく。

その中で、若葉はただ一人――強い意志を秘めた目をしていた。

第４話　若葉ＶＳ奏

その日の夜。若葉は一人、とある扉の前に立っていた。決意したように真一文字に口元を引き結び、扉を叩く。
少しして、中から現れたのは奏だった。
「ああ、乃木さんか。どうしたんだ？」
「少し、いいだろうか」
「…ここで話すか？」
「いや、少しついてきてもらえるか？」
「わかった」
若葉について歩いていくと道場のような場所へと到着した。奏は目を輝かせて見上げている。
「すごいな。道場なんて文献の中でくらいしか見たことなかった！」
「…話をしてもいいか」
「おっと、すまない。どうぞ」
向かい合うように立つ二人。
「お前は、言ったな。未来に討つ『カミサマ』との戦いのためについてこいと」
「ああ。言い方は少し違うがそう言った」
「もし私達がここから離れたら四国はどうなる」
「…そうだな。話すべき話であることはわかっている。だが、こんな言い方は悪いとは思うが俺には説明しがたい。こういう次元関連の話は詳しいやつがいる。そっちから説明してもらった方が手間が省けると思う」
「それで、納得しろと？」
「俺としては、な。だが、納得できないから乃木さんはわざわざ俺を呼び出したんだろ？」
「ああ――」
一瞬の間が空いて、若葉は勇者服を身にまとう。生大刀を構え――
「私はまだ仮ではあるがリーダーの役割を拝命している。みんなを危険にさらすわけにはいかないんだ！」

「…わかるよ。だが、力で納得させようってんなら――相手になるぜ」
奏は脱力状態にこそなるが武器を構える様子はない。
「なぜ『あの力』を使わない」
「うーん…。乃木さんを見くびっているわけではないんだけどさ。『アレ』はほいほい使えるものじゃないんだ」
「慢心していると、痛い目をみるぞ」
「そんなつもりはないさ。さあ、やろうか」
奏は左半身を前に、わずかに肩を上げて拳をゆるく握る。若葉は息を吸い――呼気を止めると同時に心臓を貫く突きを――
「――っ」
「ぬるい…」
奏は正確無比の反応をもって突き出された右手の中指と薬指で突きを挟んで止めるという離れ業を見せる。
「―っ、まだまだぁ！」
距離を開けることなく上段、下段の二連突き。逆袈裟からの袈裟斬り。胴薙ぎに転じると見せかけて下段からの薙ぎ払い。手加減などなく、怒涛の連戟を若葉は振るう。
（――だと、いうのに…！）
対峙している奏は冷静だ。時には刀の腹を叩き、峰を押さえ、受けられぬと判断した時のみ刀を避ける。
冷静に、平静を崩さぬままに若葉の攻撃を捌いていく。
（そんな…、こんな力量差が…！）
振るう攻撃は当たらない。的確に、正確無比に捌かれる攻撃に若葉は歯噛みする。力量差はまさに天と地ほどの差が生じている。
「――それでも！」
「っ…！」
更に若葉の攻撃が加速する。常人には捉えられない『勇者』としての力。それをもってしてもわずかに数撃。頬や手の甲を浅く切る程度にしか届かない。
お互いに距離を取り、荒れた息を整える。
「はぁ、はぁ、はぁ…」

「・・・」
頬から流れる血を軽く指先で拭い、左手に何かを取り出した。
「…驚いた、と言っておくよ。俺自身、人間の領域なんてとっくの昔に置いてきたつもりでいた。だから『神石』を使うまでもないと思っていた」
軽く宙に放られた石――『神石(しんせき)』と呼ばれたソレを左手で受け止める。
「俺の使うこの石。これは実は使うのに多くの制約がある。一つ、『勇者』が近くにいること。一つ、俺に力を貸してくれる神様・精霊が存在していること。一つ、『神石』を砕くこと」
左手に持つ石をもてあそびながら奏は視線を少し上に上げる。そこには一体の精霊が姿を現していた。
炎をまとう蜥蜴(とかげ)――サラマンデル。奏の肩に乗り、口元から長い舌を出し入れしている。
「力を使うにあたっての問題は解消された…が、だ。俺はできれば使いたくない。先ほどの制約とは別に使いたくない理由がある。それでも――今、乃木さんが刀を納める気が無いというのなら、使うしかないだろうな」
――試されている。
若葉は直感的にそう感じた。今なら力を試しにきた、それだけで退いてやろうと。
だが、なお戦うというのなら――手加減はしない。そういうことなのだろう。だから――若葉は刀を構え直す。
「…それが乃木さんの答えか?」
「ああ。貴方が強いのは認めよう。私よりも遥か高みに至っていることも理解しよう。だが、私の方から刀を納めるわけにはいかない」
「そうか。なら――示すしかないな」
神石が握り砕かれる。視界を覆うほどの光が放たれ、若葉は目をすがめる。
「勇者の力はあくまでも神様や精霊の力を擬似的に模倣しそれを人の身で扱えるように調整されたもの――と、俺達の世界の技術者の話

だったが、どうやらもう少し複雑なようだ」
光の中から声が聞こえる。光が薄れていく中から『ソレ』は姿を現す。
「まあ、勇者の力の解説は今は要らんよな。『神石』の性質は単純明快だ。超高純度に圧縮された神気の結晶体である『神石』を砕くことで人の身に神や精霊を降ろし、それをこの世に顕現させる。人の身には過ぎた力で一日に最大でも二回、三度使えば死する可能性のある言葉通りの力」
最初に見えたのは竜の頭を模した兜。竜の鱗を模した鎧と竜のごとき腕。その鱗の隙間から炎が溢れ、その姿を茜色に染め上げている。
「二回目だがこうして見せた以上は味わってもらおうか。その力、その目と身体に焼きつけろ」
両手にそれぞれ赤と白の剣が握られる。
「いくぞ――」
「――っ！」
身構えた若葉は――とっさに床へと伏せた。遅れて響くは轟音と伏せた自身すら吹き飛ばす衝撃波。
派手に転がり、すぐに体勢を立て直して見た先――道場のおよそ半分が融け落ちていた。
「・・・」
『呆けていると死ぬぞ？』
「っ!?」
聞こえた声は耳元。身体を捻ると同時に振るった生大刀から金属を擦るような音と…横腹に響く打撃音。
再び地面を転がり――しかし意識的に視界を上げて見やる。二振りの剣を払う姿を見て、若葉は地面を滑りながらも向き直る。
「――いい反応だ。俺の世界の奴らならさっきの追撃で動きを止めていただろうな」
「――っ…」
傷は見れていないが右の脇腹から激痛が続いている。軽傷ではな

いのだろう。本当ならいますぐにでも意識を手放してしまいたい…それぐらいの激痛だ。
「わかったか、使わない理由が…。人外たるバーテックスに振るうならこれは強力な力だ。だがな、人に振るうには過ぎた力なんだよ。初撃に手加減をミスったらあのありさまだ」
剣先で示されるのは今なお焼け落ちていく道場跡。地面には溶岩のように融けた部分もある以上、脇腹に入れられた一撃は加減されたのがわかる。
「こんな力を振るったところで一人や二人では『カミサマ』には届かなかった。一方的に世界を滅ぼされて終わりだ。だから、過去にいるだろう『力』を持っている者を誘う理由は単純にそんなところだ」
「…ずいぶんと、勝手な言い分だな」
「そうだな。でも、だからこそ急いではいないのさ。少しでも多くの力を集めたい俺達にとってはな。…まあ、そのあたりのことはいい。どうする?まだ、続けるのか?」
「…当然だ」
痛みはひどいが退くのはごめんだとでもいうように生大刀を構える。
「国を、四国を護るという意思を貫けなくなるぞ」
「わかったかのように、諦めたら…私は立ち直れなくなりそうでな」
奏は瞑目する。目を開け、剣を構える。いざ――飛び込もうと深く構えた刹那、奏は若葉とは別の方へと飛んだ。
遅れて、地面を叩く音が二つ響き、誰かが着地する音が二つ続く。
「…まあ、あれだけ派手に道場吹き飛ばせばさすがに来るよな」
奏が顔を上げた先には、奏が先ほどまでいた場所に拳を突き立てた友奈と珠子。若葉を護るように並んで立つ千景と杏。
「まさかその日のうちに若葉を亡き者にしようとするとはタマにも読めなかったぞ!」
「大丈夫、若葉ちゃん!?もう大丈夫だからね!」
「えっ、いや…あの…」
「ひどい火傷…。傷が残るかも…」

「…それで?勇者４人、同時に相手取る自信はあるかしら?」
若葉を護るように４人が並ぶ。奏は固まっていたが、すぐに大笑いしだした。急に笑い出した奏に４人が構えるが…。
「あー、笑った笑った。わかったわかった、わかりました。俺はこれ以上やり合う気は更々無いから早く乃木さんの手当てをしてやるといい…と言いたいが、普通に治療してたら時間かかるしな」
奏は力を解除すると火蜥蜴（サラマンデル）と何かを話している。火蜥蜴は数度頷くと勇者達へと近寄っていく。
火蜥蜴を見下ろして固まる４人に火蜥蜴は困ったように奏へと振り返る。
「乃木さんをベッドに寝かせるなりして火傷の場所に火蜥蜴を乗せておけ。火蜥蜴の炎は攻撃に使われるが火傷などには治癒にも使える。一晩あれば傷痕一つなく治るはずだ」
見上げてくる火蜥蜴を千景が抱きあげる。火蜥蜴は目を閉じてふわりと火の粉を飛ばしだすが…。
「熱くない…。むしろ温かいくらい」
「火蜥蜴は害意なく人を傷つけることは絶対にないからな。むしろ精霊種としてはかなり温厚な部類だ。そいつに治してもらうといい。俺は部屋に帰るから説明よろしくな、乃木さん」
帰っていく奏を見送るしかなかった４人だが、全員が若葉へと振り返る。
「…説明してもらえるかしら?」
火蜥蜴を抱いた千景の声に、若葉は顔を逸らすしかなかった。火蜥蜴は目を閉じて寝始めていた。

第5話　勝手気ままな精霊

「若葉ちゃんは何を考えているんですか！」
　若葉の部屋に勇者5人とひなたが集まっていた。ベッドに寝かされている若葉は顔をひきつらせながらも必死に壁の方へと向いている。
　火傷のあるお腹の上には火蜥蜴が乗っており、先ほどから聞こえる怒号にも気にせずに寝息をたてている。その火蜥蜴を千景と珠子はつついているが、火蜥蜴は起きる気配はない。
「彼とは敵対しないように最初に言ったはずですよ！」
「…そ、そうは言うがな、ひなた。あんな訳のわからない話をされて傍に置いておくのも怖くはないのか？」
「まぁまぁ、ひなたさん。若葉さんの言い分もわからなくはないんです。実際問題として、奏さんは私達にほとんど何も説明していないに等しいんです」
「…そう、ですね」
　本人は説明した気になっているが、聞かされた側からすれば何の説明にもなっていなかったとも言える。
　わかっているのは『彼が途方もつかないほどの未来から来た人間だということ』『宿している力は勇者など比にもならないほどの強さを持っていること』。奏に関してわかるのはせいぜいがこの辺りだけだ。
「でもさ…。あれだけ強いなら若葉ちゃんをサクッと殺しちゃってもおかしくないのにどうしてそうしなかったんだろ？」
「彼が言っていた通り、未来での戦いに私達が必要だと考えているのだと思います。だからこそ、彼からはこちらに危害はくわえてこないでしょう。今回のようにいきなり挑みかかったりしないかぎりは…」
　ひなたのジト目から若葉は顔を逸らしたままだ。
「こいつ、動かないな」
「よく寝てるわね」
「あの、タマっち先輩、千景さん。仮にもその子精霊なのであまりイタ

ズラしすぎない方がいいと思うんですけど」
「大丈夫だって。ほら、これだけ触っても何もしてくる気配ないんだぞ」
頬のあたりをブスブスと突っつく珠子に火蜥蜴を眺めていた千景はいつの間にか薄目を開けてこちらを見ている火蜥蜴に気づく。
おもむろに大きく口を開けた火蜥蜴は突っつく手に噛みついた。
「…あ」
「・・・」
噛みつかれた珠子の動きが止まる。火蜥蜴の口の端からはわずかに火が漏れているからたぶん手が焼かれているのだろう。
「うぇあああ!あっちぃいいいぃ!!」
火蜥蜴が珠子の手をくわえて放さない間、部屋の中は阿鼻叫喚になった。
――――数分後。
火蜥蜴の口の中で右手を焼かれた珠子は杏の膝枕で倒れている。大火傷してもおかしくない焼き方だろうに、右手には火傷の痕がまったくない。
当の火蜥蜴は若葉のお腹に乗っかったまま再び寝息をたてている。
「千景だって一緒に突っついてたのになぜタマにだけ!?」
「やり過ぎるからよ」
「珠子の手を焼いていた時だけ熱かったぞ…」
「ま、まあ、無事で良かったよね?」
膝枕で倒れていた珠子が起き上がると他の勇者達も若葉に向き直るように半円に座り直す。
「…で、だ。タマ達は話し合ったんだけどさ。今は大社から若葉に仮のリーダーをしてもらってるじゃないか」
「うん?まあ、そうだな」
「正式に若葉がリーダーになってもらった方がいいんじゃないかって話がまとまったんだ」
「…私でいいのか?」
若葉の言葉に全員が頷く。

「そう、か。わかった。不肖、乃木若葉。『勇者』のリーダー、引き受けさせてもらう」
「よろしくね、若葉ちゃん」
「頼むぞ、若葉！」
「よろしくお願いします、若葉さん」
「お願いね、乃木さん」
「これからもよろしくね、若葉ちゃん」
「ああ。みんなも、よろしく頼む」

☆

――あれから数日。バーテックスの襲撃は途切れており、若葉達は日々勉学や修練に明け暮れる中、奏は丸亀城から城下町を眺めていた。
「のどかだねぇ…」
足下にはあれからもなぜか火蜥蜴が居座っている。普通であれば、精霊達は奏に力を貸してもせいぜいが一日二日程度。
この火蜥蜴みたいに一週間近くに渡って居座るというのは奏にとっては珍しい状況といえる。
「お前さんは珍しいやつなのかもな」
『・・・』
しゃがみ込んで頭を撫でていると火蜥蜴がおもむろに入口の方へと歩きだす。そこへ若葉達が帰ってくる。
「おっ、火蜥蜴がいるじゃないか」
火蜥蜴を見つけた珠子が手を伸ばす…が――
『――っ!!』
火蜥蜴は口から火を漏らしながら大きく口を開けて珠子を威嚇する。その様子に珠子は目に見えて落ち込んだ。
「うぅ…。なんでタマにだけこいつは凶暴なんだ…？」
「なんでなんだろうねぇ」
友奈が手を出すと頭を撫でさせている。燐光が散っているのは喜

んでいるかららしい。
「最初にからかいすぎたんでしょう…」
千景は側を通り抜けて自分の席へと座る。すると火蜥蜴は千景へと近づき、軽快な動きで千景の膝の上に乗った。
「…下りなさい」
千景が抱えて下ろすが、イスに座り直すと膝へと上ってきた。そのまま膝の上で丸くなる。
千景の顔がなんともいえない顔になっている。その様子を見ていた奏は笑っていた。
「ずいぶんと気に入られているようだな、郡さん」
「…この子、どうにかしてもらえる？」
「好きにさせてやってくれないか。そもそも、精霊がそうやって自分から人へと近づく方が珍しいんだ」
「貴方の精霊でしょう？」
千景が抱き上げて床に下ろすがすでに見上げている。千景がイスに座ればまたよじ登るだろう。
「うーん。それは正確な状況じゃないな。そいつは確かに俺に力を貸してくれる精霊だが、俺と契約しているわけじゃないからさ」
「どういうことですか？その精霊は奏さんについているんですよね？」
「伊予島さんの疑問ももっともだな。…そもそもの話、俺は君達五人とは違い正式な『勇者』ではない。これはいいよな？」
「はい…」
「乃木さんには説明したが、俺が『勇者のような力』を使うには三つの条件をクリアする必要があり、その内の一つが俺に力を貸してくれる精霊か神様が近くにいることだ。そして、この近くにいるやつは毎回同じである可能性は実はとても低い」
全員の視線が一度火蜥蜴に集まり、再び奏へと戻る。
「いや、言いたいことはわかるよ？ただまあ、基本的に精霊とは契約していないから留まるかどうかは精霊や神様の機嫌ありきなところなんだ。そいつが実際に長くいるけど俺に力を貸してくれるかはまた

別の話で…」
「どういうことだ？こいつって力を貸すために留まってんじゃないの？」
「うーん、土居さんの言いたいこともわかるんだけど…。基本的にはあちこちうろちょろしてる。しばらくしたら帰ってはくるけど、顕現状態を維持してるのはそいつなりに何かあるんだと思うが…」
「ふむ…。精霊にも個性がある、ということか」
そうこうしているうちに窓から火蜥蜴が落ちていく。どうやら千景の頭に登ろうとしていたのか、千景が思いきりぶん投げていた。
「…あいつ、千景のこと気にいってんのかね」
「傍迷惑な精霊よ…」
肩で息をしている千景になんとなく全員が肩を叩いていた。

――その夜。
「…なんでいるのかしら」
千景の部屋の片隅。クッションに座るように火蜥蜴がいた。しばし睨み合うようにお互いを見つめていたが、千景はため息をついてベッドへと寝転ぶ。
（明日にでも引き取ってもらうしかないわね…）
目を閉じていても気配だけは感じることができた。しばらくはクッションのあたりにいた気配はゆっくりとこちらへと近づいてくる。
（……っ）
掛布団をまくりあげると火蜥蜴が脇腹あたりでまるくなっている。
「なんなのよ…」
『――』
火蜥蜴は訴えかけるようにこちらを見ている。千景は再びため息をつくと掛布団をおろした。
「なんか、いいや…」
いろいろと諦めて目を閉じる。火蜥蜴のいるあたりだけとても温かく感じた。

第6話　郡千景

次の日、千景はバスに揺られてとある場所へと向かっていた。そこはかつて千景が生活していた村。
千景はイヤホンをつけ、ゲームに没頭しながら――ふと足下に視線を落とす。そこにはなぜかついてきた火蜥蜴がいる。
こちらへと出かけてくる前からこの火蜥蜴は自分の周りを常にうろちょろしていた。あげく、御剣奏に引き取るように頼みに行ってみれば彼の肩には一体の人魚のようなものが座っていて…。
御剣奏より「火蜥蜴がしばらく俺のそばにいなかったから他の精霊が寄ってきたみたいだ。悪いとは思うんだけど、郡さん。火蜥蜴はしばらく見ておいてよ」などと言う始末だ。
「どうしてこの精霊は私につきまとうのかしら…」
自分には精霊に気に入られるようなことをした覚えはない。そもそもこの精霊は何物なのか？
上里ひなたに聞いてみたが「神樹様に属する精霊ではないようです。ただ、精霊の格としてはあまり高くないようで、神樹様もあまり気にしていないようですけど」ということだ。
「…まあ、面倒を見ろと言われたからしばらくは見るけど…」
村に程近いバス停に降り、家へと向かう。チラホラと見える村人はこちらを見てなにやらひそひそと話している。
千景は視界に入れないようにしながらイヤホンをつける。
家に着くとそこはゴミ屋敷といって差しつかえない程度には荒れ果てていた。
「あの人は…」
文句の一つでもつけてやりたい。そう思う千景の足下を火蜥蜴は通り抜け、いくつかのゴミ袋の臭いをかいでいる。
「…何をしているの？」
しばらく臭いをかいでいた火蜥蜴はおもむろに一つのゴミ袋を丸呑みにする。モシャモシャと咀嚼し、呑み込んだのか口が小さくなると小さくゲップする。

いくつか臭いをかいで、火蜥蜴の何かしらの基準があるのか再びゴミ袋を丸呑みにし始めていた。
「…まあ、いいか。綺麗にはなるだろうし…」
一瞬止めようかと悩んだが勝手に食べ始めているのだし千景としては家が少しでも綺麗になるのならと止めることをやめた。
和室へと繋がる襖を開けるとその奥で布団に寝転んでいる一人の女性。その傍の壁に背を預けて酒を呷る一人の男性。
「千景、帰ってきたのか」
「…このありさまはなに？まるでゴミ屋敷よ」
「すまないなぁ。ほら。俺もいろいろと忙しくて片付ける暇がなくてな…」
どの口が…、と文句を吐こうとして千景は口を閉じる。言うだけ無駄だからだ。
この人は家庭を省みることなどしなかった。自分本位で家族を見向きもしなかった。母親もそんな男を相手にすることもなく、日々遊び歩く毎日を送っていた。
陰に日向に蔑まれていた子がいたことなど気にも止めることなく…。そんなだから、自分は何も感じないものとして生きてきたというのに――
「今さら…、家族ごっこなんて…」
踵を返して玄関から出るとそこには多くの村人が集まっていた。口々に聞こえるのは「勇者」となった自分を讃美する言葉。
――わかっている。これはご機嫌取りだと。
今まで自分に対してしてきたことから復讐されたくないがための手段だと。だから――
「――私は、価値のある存在ですか？」
『もちろんよ。だって貴女は、勇者だもの』

☆

樹海化の中。千景は大葉刈りを構えながら迫りくる『星屑』を眺め

ている。
「…で、なんで私の頭に乗っているのかしら」
頭の上に乗っていた物体――火蜥蜴をつまみ上げて自分の顔の前に持ってくる。紅い瞳は千景を映しているが、その瞳からはどんな意思があるのかまでは読めない。
『…シュルル…』
「…貴方、鳴けるのね」
『…シュウウウ…』
「…なんでかしらね。なんとなくだけれど、貴方の言いたいことが伝わってくる気がするわ」
わかってはいるつもりだ。でも、今までの『私』には価値なんてなかった。今の私は『勇者』だから価値があるのだ。
『勇者』として戦い続けるかぎりは私の価値は失われない。
『・・・』
「…そうね。でも、今はそれでいいと思っているの」
『…シャァ』
火蜥蜴のサイズが小さくなり、千景の左肩に乗る。その頭を指先で撫でると燐光が散る。
「ぐんちゃん、すっかりその子と仲良しだね」
「高嶋さん…」
いつの間にか他の勇者達も集まってきていたようだ。当然、その中には御剣奏もいる。
その姿は女性的なフォルムに水のヴェールをまとうように、少し浮いている。
「すごい姿ね」
「いやぁ、水の精霊…水乙女（ウンディーネ）の力を借りたらこんな感じになってしまって…。外観にここまで影響が出る精霊も珍しいんだけどなぁ」
声も心なしか高い声に変わっていて、女性で通しても問題ない状態である。
「いいんじゃないか?『勇者』ってのは無垢な少女がなるものだって大社も言ってたぞ!」

「いやぁ、さすがに勘弁願いたい…」
「それにしても、本当に違和感ないですね」
「何も嬉しくないフォローだ…」
珠子や杏の励まし?に奏はどんどん落ち込んでいく。
「さて、そろそろ来るぞ。みんな、気を引き締めろ!」
若葉の言葉にそれぞれの神器を構える。星屑が一斉にこちらへと突っ込んできた。
千景は大葉刈りで一度に数体を斬り捨てながら駆ける。視線の先には若葉がいた。
(同じ勇者なのに…、彼女とは差が開いていく…)
若葉はその類いまれなる身体能力によって瞬く間に数十もの星屑を斬り捨てている。自分はそこまでの速さもなければ周囲を見渡せるだけの技量もない。
「…っ、ぐんちゃん!」
「――っ」
槍のようなもので胸を貫かれた千景が結界の隙間へと落ちていく。身を乗り出して千景の落ちた場所をのぞきこむ友奈の左右に、先ほど貫かれて落ちたはずの――白い外套を頭からかぶる千景が降り立つ。
「えっ、ええ!?ぶ、分身の術?!」
千景『達』は次々と星屑の向こうから槍のようなものを射ち出してくる進化体へと突っ込んでいく。途中、一人二人が貫かれるが、すぐに数を戻し、総勢七人の千景が鎌を振りかぶる。
「今の私を殺したいのなら――七人同時に屠ってみせろ!」
七撃を連続して受けた進化体が崩れ落ちていく。
「大葉刈りは、全ての命を刈り取る鎌よ。あなたごときに、私は負けていられないの」

☆

戦いが明けた夜。千景の部屋には部屋主の千景以外に高嶋友奈と御剣奏の2人がいた。友奈は千景の隣に座っている。

「それにしても、今日のぐんちゃんは凄かったよね～」
「確か…『七人御先』だったか？」
「そう。七人同時に存在して、七人同時に殺られないかぎりは際限なく戦える私の『切札』」
「なるほどなぁ…『七影の闇者』とはよくいったものだ。あれは俺が対峙しても苦労するだろうな。精霊の引きによったら俺でも負けるかも…」
「あら？貴方みたいな強い人でもそういうこと言うのね」
「そりゃあ、簡単には負けない…とは言いたいけどな。俺の力は力を貸してくれる存在ありきだから、場合によったらすこぶる相性の悪いのに当たることだってあるさ。まあ、ここにある火蜥蜴や水乙女なら、そうそうに負けたりはしないだろうけどな」
「そういえば、水乙女の姿、綺麗でしたね！」
「高嶋さん…。そろそろ勘弁して。俺のライフもそう高くはないんだよ…」
　奏は顔が赤くなっているのがわかるので手で覆って伏せるしかない。奏自身、今までにいくつもの精霊や神様から力を借りはしたが姿が『女体化』したのは経験がない。
（なんだかんだと今思い返してみれば、女性的な精霊や神様からは力借りたことほとんどなかったんだよなぁ…）
　奏自身も今回ばかりはさすがに羞恥心の方が勝ってしまってまともに戦えたとは言いがたい。
「…まあ、いいや。――ところで、俺は郡さんに部屋に来てほしいって呼ばれたから顔を出してるわけだけど、俺に何か質問かな？」
「…そう。実は、この子について聞きたいの」
　千景が左手で撫でているのは丸まった火蜥蜴だ。勇者服の時は肩に乗れる程度のサイズダウンをしていたが、今は普段通りのサイズに戻っている。
「この精霊、今は私の傍から離れようとしないし気がついたら部屋に入り込んでいたり…。…まあ、それはいいの。問題は、御剣さんにとってはこの精霊は力を貸してくれる存在なのではないのかしら？」

「…うーん。とりあえず、俺の力、『神石』に関することを軽く説明するが…。『神石』っていうのは神様が使うとされる力――『神気』を特別な方法で高純度圧縮したものだ。極端な話、この石を今俺の肩に乗っている水乙女やそこにいる火蜥蜴にあげれば下位精霊から下位神ぐらいにはランクを上げられるだけの力がこの石にはある。もちろん、石の力を使い果たすまでの限定的なものだけどな」
「それって、バーテックスも強くなったりする？」
「…ああ。高嶋さんの言う通り、これはバーテックスの星屑が食えば一体で進化体くらいにはなるだろうな」
「…そんな力なのね」
「まあ、力の方向性は今は脇道だから置いておくとして…。精霊は俺に力を貸してくれた際に『神石』の一部を自身の力へと取り込んでいるんだ。火蜥蜴はその際に人間でいうところの『自我』を獲た可能性がある。もちろん、肩に乗っているこいつもそうだ。偶然か必然か、自分の意識とやらを持ったこいつらからすれば自分の興味の持てる存在の傍にとりあえず居たいと思ったんじゃないかと、俺は思う」
「それは、火蜥蜴は私に何かしらの興味があるってこと？」
「興味の内容までは、俺にもわからないけどね。自我持ちの精霊ってのは希少存在に近いから、俺の時代にはほとんど存在していなかったんだ」
「そう、なんだ…」
　火蜥蜴を撫でているとゆっくりと尻尾を振っている。
「俺から頼むことでもないんだけど、しばらくは火蜥蜴の自由にさせてやってくれないか。そいつなりに役に立とうとはしてくれると思うからさ」
「・・・」
　不意に頭を過るのは実家でゴミを丸呑みにしていた火蜥蜴。あれは火蜥蜴なりに何かしようとした結果なのかもしれない。
「わかったわ。しばらく…少なくとも火蜥蜴が飽きるまでは、私の方で世話をするわね」
「ありがとう、郡さん」

「お礼を言われるようなことでもないから…」
気恥ずかしくなって目をそらした千景だったが、今まで静かに聞いていた友奈と目が合う。
「嬉しそうだね、ぐんちゃん」
「そう、かしら」
「うん。嬉しそうに、笑ってるから」
「…そうなのかも」
火蜥蜴を撫でながら、千景は優しく目を細めているのを友奈と奏がニヨニヨと見つめていた。

第7話　模擬戦

教室の中で授業を聞いている珠子は眠そうに欠伸を噛み殺していた。
（眠い…。昨日はなんだかんだと疲れたからなぁ…）
『――』
（ん…？なんか視線を感じる…）
視線を感じて珠子は顔を上げる。そこには首を傾げる水乙女が珠子を見つめていた。
「…確か、昨日御剣さんのところに現れた精霊、だっけ？」
『・・・』
「…えーと、なんでタマを凝視してるんだ？」
『…クスクスクス』
「――えっ？」
目の前の水乙女が笑い出した――と思った途端、珠子の顔を突如水のヴェールが覆った。
「ぐっ、ガボォッ?!」
一瞬にして酸素から水に切り換えられて珠子は焦る。水をどうにかしようと手を伸ばすが水なんか掴めるわけもなく、手は水を貫通して自分の顔にしか触れられない。
（し、死ぬ…！っていうか、こいついきなり何を――）
それも束の間、水のヴェールはあっさりと消滅した。怒りに震えるままに珠子は立ち上がる。
『クスクスクス…！』
「テメェなぁ」
「…怒りたい気持ちもわかるがな、土居さん。今は何の時間だろうか？」
水乙女の後ろには肩を教科書で叩く奏の姿。今は奏が『勇者』達に勉強を教えることになったために組まれた特別な授業の真っ最中だった。
「…あ」

「疲れているのはわかるが、堂々と居眠りしてんじゃねぇよ！」
ずぶ濡れになった頭を教科書で思いきり叩かれた珠子は勢いそのままに着席するしかなかった。

☆

「くっそー…。何もあんな全力で叩かなくてもいいだろ…」
「いやぁ、さっきのはさすがにタマっち先輩が悪いと思うよ」
昼休み。御飯を食べながら先ほど叩かれた場所をさする珠子に杏は呆れた様子で返事を返す。
「せっかく御剣さんが勉強を教えてくださっていたのに、それを聞いていなかったのはタマっち先輩ですよ」
「それはそうなんだけどさ…」
『・・・』
「…つーかなんでお前はそこにいるんだよ？」
珠子の食べているうどんの器の縁に水乙女が座っている。器の中を見ている。
「…あげねーからな？」
『・・・』
「・・・」
うどんを一本、箸で水乙女に与えるときちんと両手で持ってかじり始める。最初の一口からは勢いよく食べ始めたので気に入ったようだ。
「こうやって見ていると精霊って可愛いよな」
「タマっち先輩、なんで火蜥蜴にあんなに嫌われたんでしょうね」
「本当になー。まあ、確かに弄りすぎた気がしないでもないけどなー」
『・・・』
「はいはい。食べたいだけ食べろー」
うどんをもう一本渡すと黙々と食べ始めた。
「…さて、飯終わったら昼からってなんだったっけ？」
「確か、模擬戦だったはず――御剣さん込みの」

「あの人の強さってどうなんだろ。身体能力とか高いのか？」
「この前丸亀城の外壁でロッククライミングしてるのは見たことあるかも」
「…なんとなくだけどあの人いろいろとアホなことしてるよな」
うどんに満足したのか水乙女は器の隣で寝ていた。

☆

丸亀城の木の上に若葉は立って周囲を見渡している。
「…さて、久しぶりの模擬戦なんだが。今日の範囲は城の敷地内という話だしすぐに出会うことはないと思うが…問題はひなたの開始前の説明だ」
『今日の模擬戦ですが、御剣さんの参戦と他に戦いに紛れ込んでいる存在がいますから気をつけてください。彼等も勝利者の権利目当てに参戦したらしいので』
「…今思い返してみて思うがいったい誰が参戦しているんだ？」
ひなたは『彼等』と言っていたから複数なのはわかるが普通には戦いに出ない人ということだろうか？
「大社から誰か参戦してきているとかではないよな？」
『・・・』
「・・・」
気がつくと水乙女が近くに浮いていた。視線が合った気がしたので見つめていたが、水乙女は両手をこちらへと向けて――!?
「くっ!?」
木から飛び降りた一瞬後、木の上部が水によって両断される。生大刀を構えながら水乙女へと向き直ると再び両手を構えている。
「まさか…参戦してるのは精霊ということか！」
『クスクス…』
「これは、確かにやりづらい相手だな！」
若葉が水を避ける。威力はウォーターブレードクラスで木くらいなら易々と切り裂いている。

「バーテックスより質が悪いぞ！」
『クスクスクス…』
「さて、どう対応する、か!?」
　頭を上げようとした頬を何か掠める。瞬時に生垣へと飛び込むと水乙女が水で盾を作り出して矢を止めていた。
「あれは、杏の矢か。位置は把握できないように逐次変えている感じか…」
『…ムゥ…』
　水乙女が矢に貫かれた――と思った途端に水が落ちる。
「代わり身か…。あれを倒すにはなかなか手を焼きそうだが…」
「よう、乃木さん」
　振り返ると奏が座っている。
「なぜこんなところに？」
「いやぁ…。なんでか知らんけど精霊達に追い回されててさ。さっきようやく土人形（グノーム）を撒いてきたところ」
「土人形？」
「ああ。水乙女（ウンディーネ）、火蜥蜴（サラマンデル）、土人形（グノーム）、風燕（シルフィード）の四体が参戦してる。あいつら、どうやら何か上里さんに吹き込まれたようなんだよな…」
「そもそもなんで精霊が四体に増えているんですか」
「火蜥蜴と水乙女がこっちに顕現状態を維持してるせいか寄ってきたんだよ…」
「…大変そうですね」
「いや、模擬戦に参加させる上里さんよりはマシだと思う」
「確かに…」
　生垣から顔を出すがあちこちで剣戟のような音が響いたりしているが、姿は見えない。
「どこでやり合っているのか――なんで俺に切先を向けるのかな乃木さん」
「そもそも御剣さんも参戦メンバーでしたね」
「ああ、確かに…。とはいえ、今は――逃げた方がいいな!?」
　二人が見上げた先には白い鳥が見下ろしている。その前に真っ白

になるほど圧縮されている風の塊が見えて――
「じゃあな、乃木さん！」
「くっ――」
走り出した奏とは別方向へと駆ける。白い鳥は瞬時に奏へと風の塊を向けて撃ち出す。
「なんでお前ら、俺ばっかり狙うんだよー?!」
『――!!』
白い鳥が咆哮を上げて奏の方へと飛び去っていく。
「今日の模擬戦は油断していると死にかねないぞ…」
すでに周囲は破壊痕だらけで精霊達が手加減していないのがよくわかるありさまだった。

★

ところ変わって、千景は杏と戦っていた。飛来する矢を切り落としながら距離を詰めようとしている。
「くっ…。なかなか距離が詰まらない」
杏はバックステップを踏みながらも的確に千景の足下へと矢を射抜いてくる。必然、鎌で弾くとどうしても移動速度は落ちてくる。
（無理をすれば踏み込める。でも、たかが訓練。そこまでするべきなのかしら…）
矢を弾きながら千景は一度足を止めた。深く息を吸い――吐き出す。
（――違う。訓練だからこそ、手を抜くのは間違いね。訓練でしないことを本番でできるわけないのだから！）
千景が身体を深く沈める。鎌を身体で隠すように後ろへと構え、右足を後ろへと滑らせる。
千景の構えに杏は初めて背中を向けて駆け出した。
「――ゲームの真似だからできないだろうけど」
千景の身体が地面を滑るように駆ける。開いた距離を瞬く間に詰め、杏と並ぶ瞬間――

「ここっ!!」
「――っ」
千景の振るった鎌が杏の前髪を揺らす。寸前でかわされたが千景はすでに鎌を上段から振り下ろす体勢だ。
「取っ――」
「――私の、勝ちです」
鎌が手元からすっぽ抜ける。鎌の刃に横合いから何かが当たったのは手の痺れから把握するが…
「なにが…!?」
「ゲッ…!?」
見えたのは旋刃盤を放つ構えを取った珠子。どうやら体勢を崩した杏を狙い打とうとしたところのタイミングがかぶり、旋刃盤で鎌の腹を叩いたといったところだろうか。
だが、千景は杏に向かって身体を投げ出すような体勢だ。鎌が無いのは仕方ない。拳を握って殴る姿勢を取る。
「…っ?」
視界の端に何かいる――と判断する前に千景の顎を何かが殴り飛ばした。
薄れゆく意識の中で、千景が最後に見えたのは自分に向かって手をかざす土人形と珠子に向かって威嚇している火蜥蜴の姿だった…。

第8話　走るもの

霞んだ視界の中、千景は意識が浮上してきたのを感じる。
「あっ、ぐんちゃん、起きた？」
「…高嶋、さん…？」
頭の中にかかっていた霧のようなものが晴れてくる。そこでようやく千景は自分の状況を理解した。
「あっ、あの…、高嶋さん…。どうして膝枕…」
「えっ？だってぐんちゃん気を失ってたし…。適当に地面に転がしておくのもどうかなぁ、って…」
「べ、別によかったのに…」
「あっ、ぐんちゃん顔が赤くなってる」
「――っ」
恥ずかしくて真正面にある友奈の顔から視線を外すために横を向く。そこにはそれぞれ座っていた。
「…そういえば、結局誰が勝ったの？」
「おっ。千景も目を覚ましたのか。今回の模擬戦の勝者は杏だ」
「伊予島さんが…？」
こう言ってはなんだが杏の武器はクロスボウだ。千景の記憶だと自分や珠子がかなりの近距離まで踏み込んでいたし、精霊が二体いたはず。
あの状況からいったいどうやれば杏が勝てるというのだろうか。
そんな千景の疑問顔を見て若葉は得心したかのように頷いていた。
「千景の疑問もわかる。が、そもそもにおいて今回の模擬戦、勝者が杏になることはほぼ既定路線だったようだ」
「…どういうこと？」
「精霊四体の参戦はそもそも杏の発案らしい」
「――は？」
「杏が精霊達に賄賂を贈って最初から味方へと引き込んでいたようだ。自分が勝った場合にも追加報酬を渡すことまで契約していたようだしな」

若葉の見る先には一体一つ、精霊サイズに合わせたパウンドケーキが置いてあり、四体それぞれが美味しそうにパクついている。
「…出来レースだったということ？」
「ああ…。しかも、ひなたは事前に知っていたようだ」
「でしょうね。でないと、精霊の参戦なんて認めるとは思えないもの」
「ああ。だが、私もそうだが意識を切り換えるにはいい模擬戦だったともいえる」
「どこが？」
「精霊の参戦によって私達は本来の味方同士でさえ全力で立ち向かう必然的状況に陥らされた。普段の模擬戦であれば我々は味方という気持ちもあって全力で倒しにいくということはなかなか起きない」
「…確かにね」
今回の模擬戦では勝者が一つ『皆に何かしらの命令できる権利』を賭けてはいたけれど、それも本気にさせられたかと言われるとそうでもない。
しかし、精霊四体に御剣奏。彼等の参戦によって『命令権』は内輪のお遊びから本気の模擬戦の景品へと変わった。
「とはいっても、精霊四体は最初、やたらと御剣さんを追い回していたのはなぜ？」
「杏曰く『命令権の中は聞かなくてもなんとなくわかりますから』だそうだ。先に倒しておくべきだったから精霊達に任せたんだろう」
よく見れば精霊達の向こうに身体のあちこちがボロボロになった奏がうつ伏せに転がっている。死んではいないようだが、かなり派手にやられたようだ。
「あれ、生きてる？」
「大丈夫だと思う。さっき珠子がつついていたが動いていたしな」
虫の息というやつではなかろうか。千景は身体を起こす。
「伊予島さんは何を命令するのかしらね」
「なんだろうねぇ」
「高嶋さん、膝枕、ありがとう」
「うん。いつでも言ってね」

言えばしてくれるということだろうか。機会があれば頼んでみたいが先ほど赤面を見られた後だ。頼める自分がいる気がしない。

☆

模擬戦から二日。樹海化した中で奏達はバーテックスの侵攻を眺めていた。

「今回は最初から進化体がいるな」

「いるが…、なんだあれは」

見えているのは人間の足を模した進化体が樹海の中を駆けている。星屑と比べると移動速度はかなり速い。

「二足で全力疾走って…。いや、バカに出来ない速さではあるけどよ…」

「ふっふっふっ。でもだ、人型を取ったっていうことはこういう武器も効くようになっているかもしれないってことだ！」

珠子が懐から高らかに取り出したのは――うどん玉だった。意味がよくわからない奏は…

「それが何の役に立つんだ？」

「わからないか？人型ってことは人類の美味しい食事にも興味を持つかもしれないってことだ！だから、これをこうやって使うのだよ！」

どうやら四国勇者にとってはわりと有名なメーカーのうどん玉らしく、珠子が勢いをつけてうどん玉を投げるのを誰も止めなかった。

進化体はうどん玉を――見向きもせずに通り過ぎる。

「…まあ、予想してた通りな気もするけど…」

「かまたまじゃ、なかったからか…!?」

「あのバーテックス、許せん！」

「食への冒涜ね」

謎に怒り出している勇者達を横目に奏はため息をつく。

「仮にバーテックスが食に興味を示したとしても茹でてもいないうどん玉渡されたら俺でも困惑するわ。近くに氷水かお湯があるなら話は別かもだが…」

「それは、確かにそうだ…!?」
　驚愕に目を見開いている珠子に奏は再びため息が出る。頭を軽く振ってから改めて状況を確認し直す。
「うどんのことはひとまず置いといて…。あの進化体、とにかく神樹を攻撃するために全力疾走って感じだな。水乙女の力だと足止めはできたとしても倒せるかはわからんな…」
「とにかく追うぞ！」
　若葉を筆頭に進化体を追いかける。だが、星屑が行く手を阻むべく集まりだす。
「くっ…!?」
「これじゃ追えない…」
「…仕方ない。道は俺が造ろう――」
　奏を中心に水が渦巻く。膨大な水を集め――
「水よ、行く手を阻むものを退けよ！」
　構えた右手を中心に進化体を越えてまっすぐに水のドームが造り上げられる。
「これ、って…!?」
「お前らだけでも先に行けよ！ここの星屑は、俺がどうにかしてやる！土居、盾を構えろ！」
「えっ、こうでいいか!?」
　珠子が盾をこちらへと構えるとほぼ同時――大量の水が珠子の盾を押して、勇者達を水のドームが砲身となって樹海の空を射ち出す。
　ウォータースライダーでも乗っていた最中に放り出されたかのような速度で宙を加速して飛んでいく。
「無茶苦茶すんなー!?」
「それの方が圧倒的に速いだろうよ。…さて」
　奏が振り返る先には視界を埋め尽くすほどの星屑。
「来いよ。テメェらの相手は俺が引き受けてやるよ」

★

砲弾よろしく大空を舞った勇者達は地上を走る進化体を悠々と通り越して神樹と進化体のちょうど間辺りに着地した。
「無茶苦茶されたが、なんとか進化体を止められそうか」
「とはいえ、あれって走ってることは当然避けるよな？」
「そうだな。となると、奴を仕留めやすいのは珠子か杏にな。千景、私と組め。奴の侵攻ルートを限定する」
「わかったわ」
「私も手伝うよ！」
飛び出していった若葉達を見ながら珠子は旋刃盤を軽く撫でる。
「飛び道具なら狙いやすいってことなんだろうけど…」
若葉や千景、友奈の攻撃をサイドステップやバックステップ、時にはジャンプして避けていく進化体を見ながら――
（なんとかなるのか…？）
「タマっち先輩？」
「うん？」
「急に黙って、どうかしたんですか？」
「ああ、うん。あいつを、タマがどうにかできるかってな。確かにタマも遠距離戦はできるけど杏ほどの自由度は無いからな」
「そうですね。でも、やり方次第だと思います」
「そうだな」
進化体が近づいてきている。珠子は進化体の動きを注視する。
「…そうか。杏、頼みたいことがある」
「何か思い付いたんですか？」
珠子は自身の考えを伝える。杏は頷き――
「確かに…。それならいけるかもしれませんね。無理だったとしても、若葉さん達なら気がつくと思います」
「うし！じゃあ、作戦開始だ！」
駆けてきた進化体に対峙するように珠子は駆け出す。旋刃盤は射ち出すことなくバッシュ――盾として殴りかかる。
それを進化体はバックステップで距離を開けようとし、珠子はそこから腕を振り抜いて旋刃盤を放つ。そこからサイドステップで珠子

から見て左へと避ける。
「杏…！」
「はい――！」
杏から放たれた矢が旋刃盤のワイヤーに当たって旋刃盤を強引に進化体へと曲げる。それを――進化体は跳躍をもって避ける。
「そこです！」
空中であれば回避はできない。杏が二の矢を放つ。矢が当たり、進化体の片足が吹き飛ぶ。進化体はまともに着地できずに地上をころがっていくが、すぐに立ち上がろうともがいている。
「そこまでよ」
「終わりだ！」
進化体が立ち上がる前に、若葉と千景の刃が進化体に振り下ろされた。
光となって消滅していく進化体を見ながら、珠子は腰を落とした。
「なんとかなったな」
「タマっち先輩、お疲れ様です」
「おう。杏もいい狙いしてるな」
「それほどでもないですけど…」
「しかし、なんでまだ樹海化が解けないんだ？」
「あれのせいじゃないですか？」
杏の指差す先には星屑の群れの中を水のヴェールを纏いながら飛び、ウォーターカッターや砲弾上の水を打ち出して撃破している奏がいる。
しかも群れから離れてこちらへと向かおうとする星屑を優先的に撃破しながら、群れを統率するように引き連れて戦っている。
「加勢した方がよさそうだな」
「そうですね。いきましょう、タマっち先輩」
「おう！」
勇者達が介入したことで星屑は瞬く間に駆逐されていった。

第9話　病室の約束

進化体を撃破してから一日。ひなたは大社からの呼び出しで本部へと足を運んでいた。
「急な呼び出し…。もしかしたら先頃にあった神託に対すること、でしょうか…」
進化体を撃破した夜。ひなたは神樹様からの神託によって近日中にバーテックスによる大侵攻が起きることを知らされていた。
「最近は奏さんがみんなと力を合わせているようですし安心はしているんですけど…」
それでもひなたの中に不安は常にある。巫女である自分はどこまでいっても一緒には戦えないのだ。帰りを待つというのも怖い。
「大侵攻…。はたして、私達は乗り越えられるのでしょうか…」

☆

――三日後。樹海化した中で勇者達と奏は目の前の光景を眺めていた。
「おーおー。これは確かに『大侵攻』だな」
視界どころか結界の境界線を望めないほどの星屑の群れ。現状、進化体の姿は見当たらないがそれでもこの数は異常な光景としかいいようがない。
「これなら火蜥蜴の力を借りれた方がよかったんだがなぁ…」
「あの子なら私の部屋のすみっこで丸くなってたわよ」
「郡さんに近づくようになってから火蜥蜴、神石見せても興味を示さなくなったんだよな。仕方ないから水乙女の力を借りてるけど…、水乙女の力は防衛向きではあっても殲滅力は無いからこういった戦いではジリ貧な気がする」
本来ならばこれほど同じ精霊から力を借り続けること自体が奏にとってはほとんど経験が無いのだが。
「だったら、御剣さんには神樹様の防衛をしてもらって前線を維持し

つつ戦う、といったところでしょうか」
「そうだな…。いくぞ！」
　若葉の声に千景と友奈、珠子が続く。奏は後方からウォーターカッターを主軸に、前線を抜けてきた星屑を杏とともに次々と射ち落としていく。
　どれくらいたっただろうか。戦線がわずかに後退し始めていることに杏が気づく。
「千景さんや友奈さんが囲まれて…」
「いや、問題はそっちじゃない。乃木さんが突出し過ぎている」
　前線の中で、千景と友奈はお互いの背を守るように戦い、珠子は遊撃として縦横無尽に駆け回っている。
　しかし、戦線の一翼を担っているはずの若葉の姿が見えていない。
「あのバカ。見える範囲にいないと後衛が援護できないだろうが！」
「どうしましょう!?」
「…郡さんと土居さんの戦線を下げさせろ。中堅を俺が一人で支えるから、高嶋さんに乃木さんの援護に向かってもらう。…かなりの博打にはなるが」
「…わかりました。こちらは任せてください」
「頼む！」
　奏はヴェールを纏って飛翔する。星屑の群れを見下ろせる位置から大量の水を生み出して千景や友奈の周りにいる星屑を一時押し流す。
「郡さんと土居さんは一度、中後衛位置まで退避！中堅は俺が支える。高嶋さん、乃木さんの姿が見えないんだ。彼女を探して下がらせてくれ！」
「わかりました！」
「高嶋さん一人で行かせるの?!」
「無理に前線に戦力を集中して神樹が落ちれば本末転倒だ。防衛に徹しつつ勇者の安全を優先する！」
「…っ、わかったわ」
「いってきます！」

奏が開けた道から友奈が最前線へと飛び出していく。その背中を見ながら、奏は歯噛みする。
「――っ。来いよ、バーテックス…。お前らは、ここから先には行かせねぇ!!」
勇者達が後方へと下がることをバーテックスが見逃すはずもない。先ほどまでとはうってかわって攻勢を強めてきた。
いくら奏が四国の勇者達よりも強い力を有しているとはいえど、数の暴力に対しては対応し続けるのには限界がある。
「くっ、そ…」
腕から、足から、血が流れる。食らいつかれるのだけは避けているがそれもいつまでもつかはわからない。
「状況の打破には使うしかない、か…。伊予島さん！神樹への流れ弾はそちらで防いでくれっ！」
「何をするつもりですかっ！」
「このままじゃジリ貧だ。切るつもりはなかったが――」
奏は懐から新たに神石を取り出す。石を砕くと奏の身体に何かが流れ込み今までとは別格に近い力が放出される。
「神石の重ね掛け。俺にも精霊にも莫大な負担をかけることになるが――」
右手を構える奏の周囲を星屑が食らいつかんと口を開いて突っ込んでくる。
「――威力は、未知数なんでな!!」
後方にいた杏達から見えたのは星屑の群れが巨大な津波によって結界の外へと押し流されていく光景だった。津波に抗おうとした星屑は津波そのものに呑み込まれ、光へと還っていく。
津波が消えた時には、星屑の九割近くが結界内部から消失していた。
「す、すごい…」
「あれが、御剣さんの切り札…」
「…おい、御剣さん、どこだ？」
珠子の声に千景と杏も周囲を見渡す。自分達のいる場所から少し

離れたところで、元の姿に戻った奏が倒れている。
「御剣さん！」
杏が駆けていく中で、樹海化が解除されていくのを千景と珠子は見ているしかなかった。

☆

『ＩＣＵ』とついている扉の近くの大窓から中に横たわっている友奈の姿が見える。若葉自身も全身のあちこちに包帯を巻いていて、満身創痍のありさまだ。
「――なんでこんなことになったのかわかる？」
声の方へと視線を動かせば同じように包帯を巻いた千景や珠子、比較的傷の少ない杏。
「わかっている。私の無鉄砲な突出が原因だ」
「違うわ。なんでそうなったのかがわかるかって聞いているの」
「それは…」
「貴女は、バーテックスへの憎しみを晴らそうとして戦ってる。だから周りが見えていないし私達のことを気遣いもしなかった」
「違う！私は――」
「…気遣うことは私もあまりしてないから言えないわね。でも、今回全員が生きて帰ってこられたのは間違いなく御剣さんのおかげよ。あの人が自滅覚悟で力を使ってくれたから私達は生き残れた」
「若葉さん、考えてください。今回のような戦闘をしていけばいつか誰かが犠牲になります」
千景達が背を向けて歩いていく。若葉は窓越しに友奈を見つめて――
「だが、どうすればいいと言うんだ…」

★

杏と千景はＩＣＵからは少し離れた病室へと入る。そこにはベッ

ドに座る奏がいた。
「御剣さん！起きていて大丈夫なんですか」
「おう。別に肉体的には大したケガとかしてないしな。念のために精密検査するとかで入院の運びになっただけだし」
「それでも、倒れたことは事実よ」
「…ん、まぁ、な…」
「…御剣さん、貴方はどうしてそれだけの危険な橋を渡ろうとしているのですか？」
「なんのことだ」
「ごまかさないでください。『神石』による精霊・神様の力の行使。これが何のリスクもなく行われているとは思えません」
「…精密検査ってそっちの検査だったか。失敗したなぁ」
奏は伸びをすると座り直す。
「いいだろう。聞きたいことは遠慮なく聞いてくれ。少なくとも『神石』に関することは答えられるかぎりは答えよう」
「では…。精霊や神様から力を借りる――これが基本であり、よほどのことが無いかぎりは同じ精霊や神様から力を借りることはない。それはなぜなんですか？」
「まず、『神石』は説明した通り『神気』が結晶化したものだが当然ながら俺の身体・精霊や神様にも負担がかかる。俺が一日中に二回までと限定してはいるが、実際問題として二回目を使えば俺の身体はなかば自壊に近い損壊を受けることになる」
「なっ…」
「連続して力を借りない理由は単純に精霊などは本来であれば『神石』ほどの高エネルギーを何度も受け取れる格を有していないはずなんだ。この世界の精霊達は俺の知る精霊とは何かしら違うところがあるようだが…」
「…それって…。間違ったら死ぬってことじゃ…」
「ん？ああ。少なくとも２４時間中に二回使えば半死までは確実にいくな。でも、言い方は悪いが本来であればバーテックスのような存在に俺みたいな元一般人が挑むには埒外の力に頼るしかない。それが、

自分の寿命を確実に縮めかねないとしてもな」
杏は予想していたところよりもはるかに危険な橋を渡ろうとしている奏に戦慄していた。勇者よりも数段上の力だとはいえ、リスク的にみれば数段上どころの話ではない。
「…どうして、そこまでの危険を犯して私達とともに戦うんですか。確か、若葉さんと戦った時は二回目だったはずです」
「あの時は使っている時間が短かったからな。それなりに博打ではあったが。それと目的は最初に言ったはずだがな。俺達と未来で共に戦ってほしいのさ」
「それだけの力がありながら、ですか？」
「ああ。これでも全然足りないんだ。借りられるものならいくらでも借りたいくらいさ」
「…そう、ですか」
杏は目を閉じて思考をまとめていく。考えついた思考に幾度か自分で自答してから――
「わかりました。次に来るだろう大侵攻。これを防ぎ切れたのなら、私は御剣さんとともに未来へ行きます！」
「…いいのか？」
「はい。私は、決めました」
「そう、か。ありがとうな、伊予島さん」
「それで、一つだけ条件をつけます」
「なんだ？」
「名前で呼んでください。私も、そうします」
「ああ。わかったよ、杏さん」
「はい。まずは、大侵攻の時はお願いします奏さん」
握手を交わす二人は視線が合うと小さく笑う。
「――それで、私はいつまで蚊帳の外にいればいいのかしら？」
「――っ！」
ジト目の千景を見て、杏はすぐさま手を引っ込める。恥ずかしくなったのか、そのまま病室から駆け出してしまった。
なんとなく気恥ずかしい奏は頬をかいている。

「…私も」
「うん？」
「未来ってやつ、行ってあげてもいいわ」
「…あらためて聞くけど、いいのか？」
「ええ。その代わり、次はきっと決戦になる。だから――背中を任せていいかしら、奏さん？」
「…っ！ああ。期待してくれていいぜ、千景さん」
「…千景でいいわ」
「それなら、俺も奏でいいよ。まぁ、呼びやすい呼び方で呼んでくれ」
「ええ。わかったわ」
軽く手を上げると千景は察してハイタッチを交わす。握手はさっきのこともあってなんとなく気恥ずかしかったからだ。

第１０話　力を合わせるために

杏と千景から力を借りられる確約を得られてから一日。
奏は寮の近くの広場にて、ラフな格好で珠子と向かい合っていた。
「…いくぞ」
「…来い！」
珠子が一息で距離をゼロにする。奏の腰に手を回すように掴みかかるが、奏はそれをいなす。
「まだまだぁ！」
「……シッ！」
掴み・投げをメインに戦いを組む珠子といなし・カウンターを軸に戦う奏。端から見れば二人は舞いでも舞っているかのように見えるのかもしれない。
その実、一瞬の油断も許されない全力同士のぶつかり合い。頬を掠める拳や足払いからの追撃など、お互いに相手を確実に仕留められる戦い方だ。
奏が珠子を投げ飛ばす。しかし、珠子は空中で体勢を立て直すと着地と同時に両手刈りを仕掛ける。それを跳躍で避ける。
「――っ！」
視線が一瞬交錯する。奏は身体を捻っての回し蹴り、珠子はそれに合わせたように下から抉るような右アッパー。蹴りとアッパーが交差し、お互いを弾き飛ばす。
すぐに体勢を立て直す二人。お互いに向かい合って――頭を下げた。
「ありがとうございましたっ！」
お互いに礼を交わすとタオルや水筒を持って木陰へと座り込む。
「にしても、なんでいきなり組手に誘われたんだ俺は…」
「いやー、杏から聞いたんだけどさ。杏と千景って未来行、了承したって」
「うん？ああ。来る次の大侵攻を防衛できればって条件付きだけどな。俺も大侵攻を放っておく気はなかったからいいんだけど…」

「杏から聞いた。この前の大侵攻の時に御剣さんが使った大技は私達が使う『切り札』よりも数段上のリスクが伴ってるって」
「ああ。でもまぁ、出し惜しみできる状況じゃなかったしな。俺が死ぬ気になれば少なくともあの大侵攻は止められると判断してあの手段を使っただけだ」
「死ぬのが、怖くないのか？」
「うーん…」
　水筒の中身を飲み干して奏は周りを見渡す。
「他の勇者は来てないみたいだし、土居さんにだけはバラしてもいいかな。その代わり、他の勇者には他言無用だからな？」
「ああ。約束する」
「俺と妹が過去に戻る時、未来の世界はおそらく神様に滅ぼされている。それに、神様との戦いで俺や妹は幾度となく心臓止めてるしな。臨死体験はわりとしてるんだ」
「…は？」
「死ぬのが怖くないのか？と聞いたな。怖くないわけがないが、死ぬ気になってもなお倒せない奴等と散々戦ってきてるんだ。今さら『死ぬかもしれない』ってだけで切り札を切れないようなまともな精神構造してねーよ。『死ぬ気になれば勝てる可能性がある』なら死ぬ覚悟持って切り札切るさ」
「それで本当に死んじゃったらどうするのさ…」
「その時はその時だな。運がなかった。まぁ、最期の一瞬まであがくけどな」
「・・・」
　なぜか呆れた表情でこちらを見ている珠子。少ししてため息をつかれる。
「なんだよ？」
「…いや。御剣さんって最初に話した時はしっかりした人かと思ったんだけど、本当はいろんな意味で無茶苦茶な人だと思っただけ」
「ハッ！今更だな。頭おかしくないやつは神様に挑もうなんて考えないし、勝てないからって過去の英雄に力を借りようなんて考えない

さ」
「いや、本当に…。今聞いたら凄くぶっ飛んだ思考だって思った」
「それで、組手して何か決まったのか？」
「うーん。よくわからん！」
「おい…」
「…でも、御剣さんが本気で私達の力が必要だってことがわかった」
「ああ…」
「だから、この珠子様も未来についていってやる！それと、私を『タマ』と呼ぶ権利をやる！」
　立ち上がって胸元に指差し格好をつける珠子に奏は驚いたように見上げたまま固まっていた。だが、少しして笑顔を浮かべる。
「ああ、心強い話だ。よろしく頼むよ、タマ」
「ああ、タマに任せタマへ！」
「…悪い。やっぱり珠子って呼ぶわ。実家にいた猫思い出しちまう…」
「おい」
　寮の方へと帰っていった珠子を見送って奏はそのまま市内の方へと走り出す。特にどこかへ行くとかは決めていない。
　しばらく走っていると丸亀城が見えてきた。なんだかんだとかなりの距離を走って寮の近くまで帰ってきていたらしい。近くで見つけた自販機で飲み物を買って一息。
「御剣さん？」
「うん？」
　声のした方からボストンバッグを持ったひなたがこちらに向かって歩いてきていた。
「どっか出かけるのか？」
「大侵攻の対策のために大社に呼び出されました。２、３日留守にしますが気にしないでください」
「そうか…」
　ひなたはこちらを見たまま固まっている。謎の沈黙に奏は耐えきれず――

「そういえば、上里さんは乃木さんと幼馴染だったか？」
「えっ？ええ、そうですよ」
「なら、少し聞きたいんだが…乃木さんはどうして時折あんな感じになるんだ？」
「あんな感じ、とは？」
「乃木さんは戦況の把握などいろんな面で他の勇者より突出しているのは戦い方を見ていればわかる。だが、すぐに頭に血が上ったように最前線へ――下手したらこの前みたいに孤立がちになる」
「…御剣さんはなぜかわかりますか」
「…ああいう状態になったやつは幾人も見てるからな。あれは『復讐に取り付かれた』戦い方だ」
「…はい。若葉ちゃんは生大刀に選ばれて勇者となった日に目の前で学友を失っています。若葉ちゃんの戦う理由の一つにはそういった面があります」
「なるほどな。だが、それは諸刃の意思だ。いつか、その意思が彼女を殺すぞ」
「…それは…」
「わかってはいるが口出しはできない感じか」
「私は皆さんのように戦えるわけではありませんから」
　顔が俯くひなたに奏は優しく頭に手を置いた。驚いたように顔をあげたひなたに奏は笑いかける。
「バカやろう。お前が帰るべき場所としているから乃木さんはまだ死んでないんだろうが。お前がいなかったら乃木さんはおそらくとっくにくたばってる」
「…そんなこと」
「あるさ。護るべきものがあるからこそ人は強くなれる。今は頭からすっぽ抜けてるだけですぐに思い出すさ」
「そんなものでしょうか…」
「ああ。乃木さんならきっとちゃんと立ち直るさ。俺みたいなバカでもできたことだからな」
「御剣さんも経験者ですか」

「たぶん、乃木さんよりは数段上のな。大丈夫。上里さんは心配せずに対策を考えてきてくれ。俺の方でも何かできないか考えておくよ」
「…はい。よろしくお願いします」
　ひなたの視線が下向きになり少し頬が赤くなる。
「どうした？」
「あの、御剣さん…。私はいつまで撫でられているんですか？」
「おっと…。すまん、ついクセで…」
「クセ？」
「妹がいるって言ったろ？あいつのご機嫌取りの時は頭撫でてないとよくならないんだよ」
「…ふふっ、そうですか」
　小さく笑ったひなたに奏は両手をあげて降参のポーズを取っていた。
「次の大侵攻までにあいつが合流できれば戦力アップできるんだがなぁ」
「妹さんは結局どこに行ってるんですか？」
「うーん、内緒だ。ただまあ、あいつ一人が俺に合流するならこんなに時間がかかるとは思えないからな。俺とあいつは今も賭けに勝てていると確信しているよ」
「何かはぐらかされた気がしますね…」
「悪い…。でも、ぬか喜びが一番徒労だろ？」
「言いたいことはわかりますけど…」
「大丈夫だ。あいつは必ず来るしあいつは俺よりも強い。とはいえ、戦略に組み込もうにもいつ来るかわからんやつは数に計上できないしな」
「…わかりました。その妹さんが間に合うことを祈りながら大侵攻に備えるようにします」
「すまないな。別に秘密主義を気取りたいわけじゃないんだ。ただ、説明が苦手でな」
「それはなんとなくですがわかります」
「まあ、大侵攻に注力するようにするさ。上里さん、そっちの上役の方

はよろしくな?」
「ええ。あの人達のお世話は任せてください」
お互いに拳をぶつけ合う。苦笑を交わして、二人はそれぞれの方向へと歩き出した。

第11話　第二次四国侵攻

次の日。念のためにと言われた精密検査に来ていた奏はその足で通常病室へと移った友奈の見舞いに来ていた。
「元気そうだな、高嶋さん」
「御剣さんも元気そうですね」
「まあ、お互いにしぶといよなぁ」
お互いにベッドに座り笑いながら拳を合わせた。
「なんていうか、拳を合わせるっていう行動はなんだかんだと勇者達と楽しくやってる気がするな」
「…だって御剣さん。あいさつする時は必ずと言っていいほど拳を向けてくるじゃないですか」
「…ああ、これもクセなんだな…」
「クセ、ですか」
「ああ。戦友達とお互いの健闘を讃える時は拳を合わせるようにしてたからな。いつの間にかクセになってたんだ」
掌を見つめながら思わず懐かしさに浸っていると友奈は不安げにこちらを見つめていた。
「なに？」
「御剣さんってこういう時に辛そうな顔しますよね」
「まあ、な。戦友のことはほいほい思い出したくはないんだよ。なんだかんだ、妹を除けばみんな死んじまってるからな」
「…未来に帰る時ってどう帰るんですか？」
「うん？ああ。予定では神様との戦いが始まる前の時代に帰る予定だから戦友も生きているはずだよ。過去を変えるなんていう大それたことをする予定だから、もしかしたら未来に変化を生んでいる可能性はあるかもしれないけど…」
「けど…？」
「あっちは俺と一緒に戦ってきたことは頭から消え去ってるからな。覚えてるのは俺と妹だけだ」
「あっ…」

しばらくお互いに沈黙する。
「あの、ぐんちゃんに聞きました。ぐんちゃんと杏ちゃん、タマちゃんも未来に行くって」
「ああ。大侵攻止めてからな」
「私も、行っていいですか？」
「来てくれるのは嬉しいよ。俺としても、勇者達に来てくれるのが一番頼もしいし」
「じゃあ、決まりです。みんなと同じように次の大侵攻を止められたら、未来に行きます！」
「なんというか、高嶋さんは一度行く道を決めたら一直線って感じだな」
「友奈！」
「うん？」
「友奈って呼んでください。私も御剣さんのこと、奏さんって呼びます！」
「…本当に、勇者達は一直線だよなぁ」
「…？」
キョトンとした表情で首を傾げる友奈の頭を奏は全力をもって撫でる。
「なんでもねーよ、友奈！」
「か、かか奏さん！首が取れますっ!?」
目を回している友奈を見ながらも奏は撫でる（振り回す？）ことを止めない。その顔は晴れやかに笑っていた。
病室から出て、奏は病院の屋上にいた。街並みを眺めていたが、不意に病院前の庭からこちらを見上げている存在に気がついた。
「乃木さん…」
その表情は数日前、勇者のみんなから叱責されて落ち込んでいたものとは別物だった。瞳に火が入り、何かを決意した表情からもただ立っているだけのはずなのに、覇気が漲っているように見える。
彼女はこちらに気づいているのか、口パクで何かを言っている。
「『待っていてくれ』…か」

彼女はゆっくりと病院の中へと入っていく。まもなくこちらへと来るのだろう。
「なんというか、今の彼女と対峙するのは怖いな…」
扉が開き、彼女が姿を現す。ゆっくりとこちらへと歩いてくると数mの距離をあけて立ち止まる。
「なんていうか、見違えるな。数日前の気の抜けた風船みたいな雰囲気が完全に鳴りをひそめたようじゃないか」
「ああ。みんなに渇を入れてもらったからな。今の私は数日前とは別物だ」
「それはいいな。いつ大侵攻が来ても今の乃木さんなら負けないだろうさ」
「そう言ってくれると嬉しいな。…御剣さん、私の力は未来に必要か？」
「必要か不要かの話をすれば当然必要だ。俺から見ても乃木さんの強さは頭一つ抜けているようだし…。まあ？この前みたいにメンタル的には弱いところもあるようだけど」
「うっ…。それは、少しずつでも克服していくつもりだ」
「そうか。じゃあ、他の勇者とも約束しているんだ。次の大侵攻を止めることができたら、未来に来てほしい」
「…わかった。必ず、大侵攻を止めよう！」
「ああ。全力を賭して戦おう」
お互いに不敵な笑みを交わして若葉は扉から先に出ていった。奏は一度、空を見上げ――
「必ず、大侵攻は止めてみせる。そのためにも…早く来いよ、愚妹が…」

★

数日後。奏達は結界の中でバーテックスの侵攻を待ち構えていた。杏は樹海化している地面に地図を広げている。
「では、最終確認です。バーテックスのこれまでの侵攻からみて開戦

初期は星屑のみが先行して攻撃してくると思われます。これを前衛担当者の三人が迎撃。後衛から私と奏さんの二人で援護します。残り一人は疲れの見え始めた前衛と順次交代です」
「基本的には杏の説明通りだが、状況次第では俺が前衛を担当する可能性もある。幸いにも今日の精霊は『風燕（シルフィード）』のため広範囲＆連続攻撃に特化している。あらゆる戦況で対応できるだろうから何かあれば頼ってくれ」
　奏の姿は神官のような服に腰の後ろ側に小太刀が二振り、腰の両側に銃がホルスターに1丁ずつ。肩口からライフル銃の尻が見えており、両足にはピストル型のショットガンが1丁ずつ。
「神官っていうよりは狩人だよな」
「珠子のいう通りなんだよな。まあ、別に装備が過多だったとしてもバーテックス相手ならむしろ不足ない方がありがたいがな」
　全員が円を組むように肩を組み合う。
「この大侵攻を抑えることが今後の命運を変えるといっても過言ではない。だが、私達は敗けられない。この背に人類の明日を背負っている以上――」
　若葉の視線が全員と交差する。
「――必ず四国を護り抜くぞ！」
「「「「オーッ!!」」」」
　返事とともに最初に前衛を担当する若葉、珠子、友奈がそれぞれの配置へと飛び出していく。
　まるでこちらの準備が終わるのを待っていたかのように結界の先から星屑の大群が姿を現し始めた。
「始まったな…」
「予想通り、最初に星屑しか現れていませんね」
「押し切れるなら星屑だけで押し切るつもりなんだろう。こういうところはどんな神様でも変わらない。使える駒が弱くても物量が物を言うなら押し切る戦法ほど楽なものはない」
「ところで、最初の待機組に私が選ばれた理由ってあるのかしら？」
　鎌をくるくる回しながらウォーミングアップしている千景。

「ある。一番突出しやすく、疲労を厭わない若葉をサクッと交代させられるからだ」
「ああ。そう言われると納得できるわ。乃木さんは、交代を渋るかもしれないものね」
「ですけど、千景さんとは連携について話しているみたいですから、そんな相手なら若葉さんもわざわざ交代を渋ることはしませんよね」
「なるほど。わかりやすい布陣だったわね」
　後方から前衛の戦況を眺めているとそれぞれの戦法に個性が出ていてよくわかる。
　若葉は積極的に…といえば聞こえはいいが後方から見ればやや無防備に前線の他メンバーがカバーできるギリギリまで前に出て星屑を殲滅している。
　珠子は旋刃盤としての使い方をフルに発揮し、立ち位置はほとんど変えずに右へ左へと振り回し、時には引き寄せてから再度の打ち出しで倒している。
　友奈は逆手である以上接近戦になるのは仕方ない。が、若葉とは違い突出はせずに自身の割り振られた防衛ラインを割り込んできている相手を適宜倒している。
　この三人が討ち漏らして防衛ラインを越えてきた星屑を杏と奏が間断なく射ち落としていく。
「…そろそろ若葉を下がらせた方がいいな」
「そうですね。千景さん、用意は？」
「十分。むしろ待ちくたびれたわ」
　千景が若葉の下へと駆けていく。しばし二人で話し合うと若葉はすぐさま後方へと下がってきた。
「素直に下がってきたな？」
「チームで戦うと決めたのだから自分のペース配分で勝手な真似はできないだろう。千景にも怒られる」
「そうだな。とりあえず、次に交代するとするなら友奈とだ。まずは一息つけ」
「ああ。少し休ませてもらおう」

若葉は後方にある開けた場所に腰を落として座る。いつでも立てるようにはしているが、目を閉じて少しでも体力を回復させるために座った。その様子を杏と奏はチラ見してお互いに笑う。
「あれだけ自分勝手な行動していた少し前の若葉とはえらい違いだ」
「皆さんに合わせられるだけの強さは元から持っていましたから。ちゃんと話し合えば最初からこういった戦いができたのかもしれません」
「まあ、今はできているからいいんじゃないか？」
「そうですね」
討ち漏らしを倒しながら二人は前衛の疲労状況を確認しながら、適宜指示して前衛を入れ換えて戦いを継続していく。

第12話　空から落ちるもの

交代しながらの戦闘とはいえ、時間がかかればそれだけ疲労が溜まってくる。時には奏が前衛へと上がり、機動力と攻撃速度に物を言わせて敵のラインを押し込むことで休息時間を確保しながら戦っていたが――

「いよいよ本番といったところか…」

「そうですね…」

後方で敵の後方を見ていた二人の目に映ったのは進化体を形成し始めた星屑の群れ。すぐには来なくとも進化体が前衛と交戦を始めれば防衛ラインに綻びが生まれやすくなるのは自明だ。

休んでいた珠子が立ち上がって駆け寄ってくる。

「どうするんだ？」

「まあ、逆に考えれば星屑による物量戦法がこちらには通用しないとバーテックス側が判断したとも言える。この進化体を迎撃しきれれば戦闘が終わるとみていいはずだ」

「となると、全員で切札使うのか？」

「…それも一つ、かな」

「いや、安易に切るわけにもいくまいよ。まさかとは思うが切札を切らせることがバーテックス側の判断だったら全員同時に使うのは悪手だ。それに、あれはあくまでも切札。ほいほい使おうとするな」

「それは、わかってるんだけどさ…」

（とはいえ…）

ここから見えているだけでも進化体は四体。前衛が三人である以上、力押しになれば押し切られるのは確定だ。一度、前衛に下がってもらおうにも星屑の数は減少傾向にこそあれどまったくいないわけではない。

「俺も前衛に上がる。杏は後方からの援護の継続。珠子は念のために杏の護衛だ。あの足早な進化体が出てきた場合、杏一人だと対応しきれない可能性がある」

「気をつけてくださいね」

「タマにまかせタマへ！」
「じゃあ、いってくる！」
　前衛のラインに割り込む形で前に出る。
「奏さん？」
「急に前に出てきてどうしたの？」
「進化体が見えはじめた。現状見えているだけでも四体いるから俺も前衛に回る。ここからが本格的な戦闘になる」
「なるほど！」
「…乃木さんが少し突出気味だけど…」
「…仕方ない。若葉の位置からなら進化体は見えているだろう」

☆

　若葉は星屑が退いていくのを確認していた。同時に見えてきた存在に生太刀を構え直す。
「…いよいよ進化体か」
　チラリと脇を盗み見ると進化体三体と奏達三人が交戦を始めたのが見える。若葉は視線を前の進化体に戻す。
「…こい。お前の相手は――私だ！」
　蠍の尻尾のような一撃が振り下ろされる。若葉は最小限の動きで尻尾の攻撃を避け、一息で跳躍。進化体を尻尾の付け根あたりから両断する。
「これで…」
『まだです、若葉さん！』
　杏の大声に若葉が振り返る。両断された進化体は鳥のような形状へと変わり二体へと増えている。
「分裂したのか！」
『タマにまかせタマへ!!』
　珠子の声と同時に進化体二体が巨大化し炎を纏った旋刃盤に巻き込まれる形で吹き飛んでいく。

若葉が見た先には『切札』を使って姿を変えた珠子がVサインをしていた。若葉は苦笑しながらも手を振り返す。
「しかし、これはまずいぞ…」
振り返った先には星屑達が次々に進化体へと姿を変えていく様子だった。若葉の視界に見えるだけでも蠍の尻尾を持つのが二体、鳥型が三体。
いくら勇者の切札が高火力を発揮できるとはいえ限度はある。進化体で物量戦法を使われてしまえば防衛の難易度は星屑とは比べ物にならない。
「…それでも――」
今度は皆とともに『四国を護り抜く』と約束したんだ。ここで全てを諦めてやるわけにはいかない。
「――だから…力を、貸してくれ―」
若葉は駆け出す。星屑は若葉を食らわんと大口を開けて囲みこむように飛来している。
「――天駆ける武人《源義経》！」
変化は一瞬。戦装束に生太刀を構え、星屑を足場に天を駆ける。斬撃の閃光を軌跡に、進化体を瞬く間に斬り裂いて駆ける。
「まだまだぁ…！」
止まることなく星屑を足場に若葉は跳び回る。閃光の如く駆ける姿に――
「あれが若葉ちゃんの切札…」
「…だが、一時的には数は減らせても長期的にみれば無理があるわ」
「…仕方ない。俺がまた使うのが早いよな」
「――っ！」
神石を取り出した奏の手を千景と友奈が掴む。
「ダメよ。あれは私達とは比べ物にならないほどの負担を強いるのでしょう。決着が着くかわからない今の状況で使わせるわけにはいかない」
「ダメだよ、奏さん！一人が無理をするのを止めるために作戦を考えて戦っていたのに…」

「…だがな。これ以上の戦線の継続は勇者側には不利だ。若葉が力尽きればいよいよ押し切られる」
『――あまくみてくれるなよ』
　若葉が近くに着地した。近くに見えていた星屑や進化体の姿は無く、結界の縁に星屑達が新しい進化体を準備しようと集まっているのは見える。
「私はまだまだ余力はある。そう簡単には力尽きるつもりもない」
「…そうはいうが…」
「それに、最悪の場合は千景、友奈にも切札を使ってもらう。私達勇者全員が切札を使ってなお、押し切られるというのなら奏さんのそれに頼るほかない。それまでは、それは本当に切札として置いておいてほしい」
　確かにこれを使えば奏自身は神石の効力が切れると同時に戦線離脱してしまう。バーテックス側もいよいよ総力戦の様相を見せてきている以上、ここで一人が離脱するのは避けたいところだ。
「…ところで、友奈は何見てるんだ？」
「うーん。杏ちゃんが何か言ってるみたいなんだけど…」
　全員が振り返ると杏と珠子が上空を指さして何か言っている。全員で指さしている空を見上げてみる。
「…何か見えるわね」
「あれは…なんだ」
「…何か聞こえてきたな」
『――……――・・――！』
「あれ、バーテックス辺りに落ちていってない？」
「だなぁ…」
　奏はなんとなくではあるが見えているあれが何かわかってしまった。ため息しか出ないが…
「なんでため息をついたんだ？」
「たぶんだが、あの落ちてきてるやつが何かわかってしまった」
「わかるの？」
「ああ。あいつ、派手なことが好きだからな」

落ちてきている光から全員の耳に聞こえるほどに大声が響く。
『全てを、薙ぎ祓え――『雷神の鎚衝（ミョル・ニール）』!!』
光が地面に落ちた――そう見えたのと同時に結界そのものが激震した。
「「――――っ!!!?」」
奏以外の全員が悲鳴をあげる。結界そのものが揺れている今の状況を考えれば仕方ないとは思う。
「…あいつ、いい加減に手加減を覚えろと言ったろうが…」
『あはは…。零花って本当に加減しないよね…』
気がつくと一人の勇者が杏、珠子と一緒に歩いてきていた。
「…あんたが」
「はじめまして。諏訪の勇者、白鳥歌野です」
「…えっ?」
若葉がゆっくりと歌野へと近づく。
「貴女が、白鳥、さん…」
「ええ。久しぶり、乃木さん」
「――っ!」
溢れそうな涙を若葉は拭く。笑顔を浮かべると手を差し出す。歌野はその手を握り返す。
「力を貸してくれ、白鳥さん」
「ええ、大丈夫よ乃木さん。いいえ、若葉」
「ああ。歌野」
「…じゃあ、あの落ちてきた光って――」
光の辺りから誰かが跳んできた。
『いやぁ～、バーテックスもそろそろ諦めそうだよ。主力は今吹き飛ばしてきたからさ!』
現れたのは銀の騎士鎧にティアラ、肩に身の丈を遥かに超えた戦鎚を担いだ少女。
「…お前、もう少し加減しろ。結界を揺らすほどの一撃を振り下ろすな」
「いいじゃない。加減するような相手じゃないんだし」

「いや、バーテックスに加減しろって言ってんじゃないよ。四国を防衛の要でもある神樹の結界を揺らがすんじゃない」
「うーん。今の降ろしてる神様の力だと難しいんだけど…」
「それ、もしかして北欧の神様か？」
「うん。なんで使えるのかゼロもよくわかってないみたいだけど」
「…そうか」
「あの、奏さん。こんな状況で申し訳ないんですけど…紹介してもらっても？」
「えっ？ああ、そういえばそうだな。すっかり忘れてた。零花、自己紹介」
「えー、すごい投げやり…」
戦鎚を肩から下ろして地面に置く。戦鎚にもたれるように手を置いて――
「そういうわけで、はじめまして。私は結城　零花。ここにいる御剣奏の義妹で、勇者です。今日からよろしくお願いします！」
キュピーン！とでも擬音が鳴るような、目元でVサインをする。
ため息をつく奏になんと反応を返していいのかわからない四国勇者。一人お腹抱えて笑う歌野。
「…まあ、こういうやつなんだ。よろしく頼む」

第13話　紋章術

　戦いが終わっていないというのになぜか終わったかのような雰囲気になってしまい、とりあえず円陣を組んで作戦を練り直す。
「とりあえず、どうする？」
「うーん。兄さん『紋章術』使って一掃しない？」
「…確かに使えば一掃はできるだろうが、撃つまでにどれだけの時間がかかると思ってる」
「でもここには勇者が6人もいるんだし無理じゃないよね？」
「だが…」
「奏さん、紋章術ってなに？」
「…俺達の時代のオーバーテクノロジーの一つだ。勇者システムとはまた違う技術体系をしているんだが、こちらはまだ使える人が多かった」
「それを使えばあのバーテックスをどうにかできるのか？」
　見つめる先にはすでに進化体が数体見えている。その奥――星屑を吐き出し続ける大型の進化体が一つ見えている。
「ああ。紋章術にある禁術体系の中に遠距離砲撃できるのがある。俺一人では使えないが零花とゼロがいるなら話は変わる」
「まあ、問題はさっき私が使った『雷神の鎚衝』クラスにチャージ時間がかかるから」
「となると…5分はいるわね」
　零花についてきていた歌野の説明に勇者達はそれぞれに頷きあう。
「わかった。その5分、私達が稼ぐ。奏さんは零花さんとともに準備を！」
「さーて、遅参したからには大活躍しないとね！」
「いくぞ、みんな!!」
　若葉の号令に合わせて勇者達が前線へと駆ける。勇者達を見送る形となった奏と零花は――
「…さて、託された以上は失敗できないな」
「腕が鳴るよ！」

二人は背中合わせに立つと零花は右腕を、奏は左腕を前に向ける。
「詠唱、間違えんなよ？」
「兄さんこそ、忘れてたら許さないからね？」
『どうでもいいがとっとと始めてはどうだ？』

★

―ｓｉｄｅ：若葉―
義経の力が残っている若葉は一人先行していた。星屑達が包囲を完成させようと両翼に広がり始めていたのに気づき、いち早く片翼を抑えるべく駆ける。
「いくぞっ！」
――気合い一閃…！
光の軌跡が尾を引く速度をもって星屑達を次々と斬り捨て、時には足場とし、止まることなく駆ける。
「まだまだ…っ！」
着地した瞬間にわずかに体勢が崩れる。そこを進化体の一体、蠍の尾が振り下ろされ――
「させるかっ!!」
尾に絡みつくのは鞭。尾が勢いよく引っ張られ、蠍形がバランスを崩して転倒する。
「助かった、歌野さん」
「まだまだ止まらないよ、っと!!」
蠍形に向けて連続して鞭が振るわれ、バラバラに破壊した歌野は鞭で星屑の一体を捕らえて振り子の要領で宙を舞う。
そのまま宙に身体を放り出した歌野は鞭を縦横無尽に振り回して星屑を次々に叩き落とす。
「すごいな…」
思わず見上げていた若葉は、反対側で響いた轟音に目を向ける。そこには――
「タマに任せタマへ!!」

「力を貸して、一目蓮!!」
　珠子の巨大旋刃盤が走り抜け、討ち漏らした星屑を精霊の力を降ろした友奈が薙ぎ払う。
「タマちゃん先輩！上です！」
「なにぃ!?」
「させないよ!!」
　珠子の上に現れた鳥形の進化体は友奈が殴り飛ばして無理矢理軌道を変えた旋刃盤が両断する。
「ナイスだ、友奈っ！」
「タマちゃん、それ、そのまま振りおろして！」
「よっしゃあぁぁ!!」
　珠子の雄叫びとともに上空へと上っていた旋刃盤がそのまま振り下ろされる。射線上にいた星屑、進化体をまとめて薙ぎ払った。
「…凄まじいな、友奈と珠子は…」
　若葉は再び空を駆けながら星屑を斬り裂いていく。数が減ってきてはいるように見えるが、やはり一番奥にいる進化体をどうにかしなければジリ貧なのには変わりない。
「奏さんの方には護衛役を置かなかったが、大丈夫だろうか…」
「そういう余計なことを考える余裕はあるのね」
　若葉に並走するように七人御先を使った際の外套を纏った千景が姿を見せる。
「二人の近くに私の分身を三人配置してるから早々抜かせはしないわ。まあ、前線で狩れば関係ないのだけれど…」
「そう、だな。しかし、千景はそういったことにもちゃんと判断できるんだな」
「バカにしているの？」
「いや、今のは言い方がまずかったな。私は今更ながら防衛戦力のことに思考がいったが千景は最初から判断して配置してくれていた」
「…用心深いだけよ」
「それでいいと私は思う。私みたいなのが二人いるよりは私と千景がいる方が杏のいう『戦略』とやらは広がるだろう？」

「…本当に、柔軟になったわね…」
星屑が下がっていく。しかし、それは数が減ったからではないようだ。
二人の視界の端には今までに見たことのないほどの光が集まっていくのが見える。
「そうか。あれが――」
「二人の言ってた、『切り札』ね」

★

―side：奏―
星屑の群れと進化体の再度の侵攻にも勇者達が圧される様子はない。付き出した腕に光が集まっていくのを見ながら、隣に立つ零花を見る。
「しかし、白鳥歌野…だっけか？めちゃくちゃ強いな。普通に精霊降ろさずに若葉並の機動力とか――」
「あー、うん。歌野の『勇者システム』はすでにアップデートしてあるから…」
「あー、なるほどな。俺やお前と近しいシステムになってるなら相当なロスは無いはずだし、そうなったら精霊を降ろさずにあの強さにも納得がいく」
「むしろ兄さん側の勇者五人のアップデートが終わってないことに私は驚いたよ？」
「仕方ないだろ…。俺が最初に少しやらかしたのもあるがなかなか信用されなかったんだ。そういうお前はスムーズだよな」
「まあ、諏訪が陥落寸前で歌野が最期の特攻に行く前に援護したからね。最初から信頼度はほぼＭＡＸだったよ」
「俺の方はそういう感じじゃなかったからなぁ…」
「でも、この戦いが終わればみんなにもアップデートできるでしょう？」
「…たぶんな」

『お前達。エネルギーは溜まったが撃たんのか？勇者達が待っていると思うのだが』
「…早く言えよ」
『なにやら重要そうな話をしていたのでな』
「後でもできるからいいんだよ。――いくぞ、零花」
「はーい！」
二人の周囲に燐光が舞い始める。
「「其は神を穿つもの、神霊の深奥に至るもの。万物を詠う、万象を語る。あまねく編纂を纏いて万の神を屠る力。この身で唱うは人智覇闘の神術――」」
二人の詠唱に合わせて様々な色の光が二人を中心に渦巻いていく。光が閃光のごとく強い光を放ったと同時――
「「『紋章神砲（ヴァルドトラウテ）』!!」」
引き絞った腕を二人が同時に前へ突き出す。虹色の閃光が結界を照らす。光の射線上にいた星屑は光に触れた途端に消滅し、奥に控えていた大型の進化体に光が直撃する。
数瞬、進化体は光に抗っていたように見えたが光が進化体を貫き、1拍遅れて進化体が崩れるように光へと解けて消える。
「やったな…」
「なんとか、なったね…」
二人で拳を当てる。瞬間、二人は地面へと崩れ落ちた。
「あ、あ…れ…？」
「…ははっ。零花も、なんだかんだと、無茶、してたん…だな」
「あ、あはは…。緊張が、解けちゃった、かも…」
「…まあ、大、丈夫…だろ」
うつ伏せに倒れた二人の視界の端で結界がほどけていくのが見える。それを見届けながら、奏と零花は意識を手放した…。
――どれくらい眠っていたのか…。
頬に当たる風を感じながら奏は目を開ける。そこにはこちらを覗きこむ千景の顔があった。

「…ようやく起きたみたいね」
「…なんで千景が膝枕を？」
「仕方ないじゃない。貴方達が光を撃ったと思ったら二人そろって倒れるからこっちは大騒ぎだったの」
「あー…」
『紋章術・禁術終式（ついしき）『紋章神砲』』
本来であれば紋章術師数百名の命を燃やし尽くして放つ紋章術の中でも使うべからずに分類されている言葉通りの最終術式。
「俺達はゼロがいるから命を使う必要は無いんだけどさ。それだけのエネルギーを二人だけで扱うからな。身体への負担は普通の終式の比じゃないんだ」
「そんなもの、よく使う気になるわね…」
「最善手だと思ったからな」
「…今後はそういう無茶をする時は必ず相談して。私達は生きた心地がしなかったんだから」
「…悪い」
「わかれば、いいわ」
少しの間、二人の間に沈黙が訪れる。
「…あっ、零花は？」
「彼女ならあっちで白鳥さんと藤森さんがみているわ」
「藤森？」
「藤森水都。長野の巫女だった人らしいわ。結界の外で待っていたみたい」
「…ようやく、みんなを救えたわけか」
「よかったわね」
「…ああ。死ぬかもしれん目にあってよかった気はするよ」
「そう…」
結局、遅れてこちらへと戻ってきた若葉達と合流するまで、奏は千景の膝枕を堪能することとなった。

第１４話　未来行きの準備―ｐａｒｔ．１―

第二次四国侵攻から数日。
体調もすっかり回復した奏と零花は若葉達とともに教室のイスに座っていた。
「ご迷惑をおかけしました」
「すまなかった」
「いや、二人ともに元気になってくれて私達としては一安心といったところだ」
「…で、ですね。私達は奏さんとのお約束で未来へ行くことが決まっているのですけれど、早速向かうという認識でいいんですか？」
ひなたの質問に奏は首を横に振る。
「いや、さすがに今日今からすぐにでも、ってわけじゃない。荷物の準備とかもあるだろうし」
「それに、一息に私達の未来へは行かないよ。途中でもう一時代、勇者達がいる時代に寄るから」
「まだ集めるということなのか？」
若葉は驚いたようにこちらを見る。
「ああ。勇者は一人でも多いに越したことはないと思ってる。俺達がわかっている勇者達を全員連れて帰ることができれば、カミサマだって倒せると信じているさ」
「それに、みんなは見たくないかな？みんなが繋いだ未来にいる、勇者の姿」
零花の言葉にソワソワし始める者がチラホラ。
「もちろん、未来の勇者達が力を貸してくれるかはわからないけどな。でも、お願いはするつもりだ」
「…わかった。私達に否やはない。奏や零花がそう決めているのなら、我々はついていくだけだ」
「…ありがとう」
若葉の言葉を聞いて、奏は嬉しそうに笑う。
「出発はゼロのエネルギー充填時間からみて２日後。それまでは

各々、荷物の用意とかいろいろと準備をしていてくれ」
奏の言葉を最後に、その場は解散となった。

★

―side：珠子―
寮の部屋へと帰ってきた珠子は早速荷造りを始めていた。
「うーんと、着替えは当然として…。テントにカセットコンロ、寝袋と毛布、あとは何要るかなぁ…」
「タマっち先輩は何を用意してるの？」
「ん～？基本的にはキャンプ用品。未来に行ったとしてきちんとした場所で休めたりするのかわからない以上、用意しとくに越したことはないと思ってさ。そういう杏は何持っていくつもりなんだ？」
「本とか、あとは簡単な食べ物？」
「いや、さすがに飯はなんとかなるだろ…。でも、確かに何用意したらいいのかってよくわからないよなぁ」
「それより、タマっち先輩は気にならない？」
「何が？」
「『カミサマ』っていう存在」
珠子の手が止まる。確かに未だに説明されていない。
「私は最初はバーテックスの別称かなにかだと思っていたの。だけど、奏さんは必ずバーテックスと『カミサマ』は呼び分けていた」
「確かに、な」
「それに、勇者システムのアップデートもそう」
杏が手元を見下ろすのは奏と零花によってアップデートされた『勇者システム』の入っている端末。
杏が確認できているかぎりでも出力は三割は増え、防御面に至っては一部を精霊に肩代わりしてもらえるようになっている。その分、勇者から精霊に与えるものが増えていたりもするようだ。
奏の説明では『精霊に供物として食べ物とか与えるとかでも代用できる』と言っていたことから、精霊の定義が未来のシステムでは少し

扱い方が変わっているようである。
「うーん。だけど、奏さんのことだしそのうちちゃんと説明してくれるだろ。今までだって隠し事しながらもあれだけ命をかけて戦ってくれてたわけだし」
「それは…うん。わかってるつもりなんだけど」
「まあ、杏がいろいろ考えてるから不安に思うのはタマもわかってるつもりだ。だけど、今からわからないことばっかり考えても疲れるだけだと思うぞ」
「タマっち先輩ってこういう時は前向きだね」
「いいじゃん。奏さんがどうして説明しないのかなんて考えたところでわかるわけないし。あの人はあの人なりにいろいろ考えて説明してないだけかもしれない」
本当は珠子自身聞き出したいとは思っている。だけど、隠しておかないといけない『何か』があるのかもしれない。だから、珠子はあえて聞こうとは思っていない。
「さて、タマの準備は終わったし、杏の準備手伝うぞ」
「えっ？いいよ。一人でもできるから」
「いいから部屋いくぞー」
「ちょっ!?タマっち先輩？」
どこにあろうとも、なにがあろうとも、珠子は杏を護る。これだけは絶対に変わらない。

★

―side：千景―
部屋へ帰るといつでも出られるように用意してあったリュックの中身を再確認する。
『……』
「そういえば、貴方もついてくるの？」
『シャア…』
「そう。向こうでもよろしく」

隣に寄ってきたのは火蜥蜴。すっかり千景の部屋の住人になっている。千景自身、火蜥蜴が居ないと物寂しく感じるようになってしまって、愛着というものはわりと簡単に芽生えるものだなと思う。
「…バーテックスとの戦いが終わる時代へ行くって話だけど…」
今から考えて約三百年後の未来。どんな世界になっているのかわからないが、そこで自分は果たして戦えるのか…。
『――――…』
「ん…、なに？」
火蜥蜴が近づいてきたかと思うとこちらの膝頭に頭を擦り付けてきた。その頭を撫でると燐光が浮かぶ。火蜥蜴なりに心配してくれているのだろうか。
「ありがとう」
『――――』
無言で寄り添う火蜥蜴に千景は小さく笑う。
――と、玄関のチャイムが鳴る。
「…誰かしら？」
玄関を開けるとそこには――
「ぐんちゃん！」
「高嶋さん、どうしたの？」
「遊びに来たよ！」
「…別に構わないけど、準備は終わっているの？」
「当然だよ。ほら」
友奈の背には少し大きめのリュックがあった。
「持ってきたの…？」
「えへへ…。なんか、待ちきれなくって」
遠足前の子どもだろうか？部屋の中へ招き入れると友奈が見えたところで火蜥蜴が近づいてくる。
『シャアァ…』
「火蜥蜴、お出迎えに来てくれたの？ありがとう～」
友奈は足下まで近づいてきた火蜥蜴の顔を挟むように掌を当てて揉んでいる。燐光は散らないし、迷惑そうに眉間にシワを寄せている

ので喜んではいないようだ。
（むしろ、あんな風に嫌がることもあるのね…）
いつも撫でたりすると燐光を飛ばして嬉しそうにしているので眉間にシワを寄せるような嫌がる姿は見たことがなかった。
「高嶋さん。火蜥蜴、なんか嫌がってるように見えるのだけど…」
「えー？そんなことないよねぇ～」
一向に止めないので火蜥蜴はされるがままだ。喜んでいる時は必ず燐光が飛ぶから千景から見れば嫌がってるのはわかるのだが…。
（それでも土居さんの時みたいに反撃しようとはしないのね…）
嫌がる素振りは変わらないが反撃には移ろうとはしない。火蜥蜴なりに何かしら線引きがあるのだろう。だが――
「高嶋さん、それくらいで。やり過ぎると怒るから、その子」
「うーん、わかった」
友奈の手が離れたら火蜥蜴は素早い動きでベッド下奥深くへと逃げていった。
「あっ、逃げちゃった」
（かなり嫌だったのね…）
ベッド下に逃げ込みはしたが奥からは紅い眼が見えている。警戒態勢といったところだろう。
友奈がベッド下を覗き込むと威嚇するように鳴き声が響いてきた。
「なんか警戒されてる…」
「あれだけしたらあの子でも警戒すると思うわよ」
「嫌だったのかな？」
「珍しく眉間にシワを寄せてたから、たぶん…」
「ごめんね～、火蜥蜴」
友奈の声にわずかばかりの警戒心の混じる声を返してきただけで火蜥蜴は出てこない。後で少しご機嫌を取ってあげた方がいいかもしれない。
「高嶋さんは、未来に行くことにどう思ってるの」
「どうって？」
「不安とか、ないの？」

自分は不安だ。約束した時はそこまで思っていなかったが、いざその時が近づくにつれて心の中で不安が膨らんでいく。
「私は、怖い…。奏さんから渡されたアップデートのシステムを見た時から震えが止まらない…」
「ぐんちゃん…」
「だって、少なくともこれだけの力が必要なバーテックスがいるということ…。今回の大侵攻ですら全員が全力を出して防いだような状態で…。それより強いのが相手に――」
「ぐんちゃん！」
いつの間にか友奈が目の前に立って自分の手を両手で握りしめていた。
「不安なのは、私も一緒だよ。でも、みんなで行くんだからきっとなんとかなる。私はそう思ってる」
「高嶋、さん…」
「大丈夫。ぐんちゃんは、私が護るから！」
友奈の瞳は強い意思が輝いている。自分には無い、一本芯が通った瞳。
『…シャアァァ』
「…火蜥蜴？」
『グルル…』
いつの間にか火蜥蜴もベッド下から出てこちらの足下に寄り添っていた。こちらを見上げる瞳には『自分も護る』とでも言いたげな眼をしている。
「…ありがとう、高嶋さん、火蜥蜴」
千景は友奈を抱きしめる。
「わっ、ぐんちゃん？」
「高嶋さんが私を護ってくれるなら、私は高嶋さんを護るわ。火蜥蜴、その時は力を貸して」
『シャアァァ！』
『任せろ』と言わんばかりに声をあげる火蜥蜴。友奈を離すと火蜥蜴を抱き上げる。

「不安もある。恐怖も、ある。…でも、高嶋さんや火蜥蜴がいるなら、頑張れる気がする」
「うん。頑張ろうね、ぐんちゃん！」
『シャアァァ！』
恐怖は消えない。不安は残り続けている。でも、自分を護ろうとしてくれている者の分くらいは、頑張ろう。
――そう思えるようになった。

第15話　未来行きの準備―part・2―

―side：歌野―

「いよいよ、零花の言ってた未来行きか。心が躍るね、みーちゃん！」
「うたのんはテンション高いね…」
「逆にみーちゃんはなんでそんなにテンション低いの？」
　高揚感溢れる歌野に対して水都のテンションは下降気味だ。
「うたのんは長野から出てもいつも通りだね。私は四国に来るまでに見てきた景色でだいぶ落ち込んでるよ…」
「…うん。まあ、そこはわからなくはないけど」
　日本という中で街並みはそのほとんどが破壊されていた。残っている場所でも生存者などは居ず、唯一の救いとしては死体も転がっていなかったことぐらいか。
「世界中がこんな風で、四国は唯一…神樹様のおかげで大きな被害は出ていない。でも、零花さんの話だとこれから三百年はこのままってことだよ」
「そうだね。みーちゃんの不安もわからなくはないよ。でも、三百年後まで世界が続いていて、三百年後にはバーテックスは居なくなるのは歴史としてあるんならそこまで悲観する必要はないと私は思ってる」
「うたのん…」
「それでも、その先――零花の時代には人類が滅んでしまうかもしれない…。悔しいと思う。私も私の力が足りないばかりに諏訪が落ちてしまったことは今でも悔しい。でも、零花の時代は変えられるのなら私はそのためにも力を振るいたいの」
　諏訪では力及ばず、四国においてもあまり戦えたとは言えない。救ってくれた零花のためにも少しは恩返しできるように頑張らなければならない以上、落ち込んでいる場合ではない。
「私は、もう後悔したくない。諏訪のように」
「うたのん…」
「だから――…？」

ふと、誰かに見られている気がした。見渡した先――部屋の隅に土の人形が行儀良く座っている。
「貴方は？」
『――――（カリカリ）』
人形は床に文字を書く。
「グノーム？うたのん、知ってる？」
「いや、知らない。けど…」
人形はこちらを見ながら首を傾げる。コミカルな動きに見えるが、歌野はどこか土人形（グノーム）の様子が気になって仕方ない。
「なんか知らないけど、よかったら一緒に来ない？」
「ちょっ、歌野⁉」
「いいじゃない？旅は道連れ、っていうくらいだし」
『――――（コクコク）』
グノームは数回頷くと歌野に向かって腕を伸ばす。
「よろしくね、グノーム」
歌野はその腕を指先でつつく。人形のはずのその顔が――笑ったように見えた。

★

―side：若葉―
若葉は用意していた荷物の再確認を終えてベッドへと座っていた。
「いよいよ、だな…」
未来の四国。そこには何が待ち構えていて、未来の勇者とはいったいどのような人物なのか。
「…我ながら、現金なものだな…」
手が震えている。だが、若葉自身は未来へ行くことに恐怖はない。むしろ、どのような世界になっているのかすら楽しみで仕方ない。
「武者震いなど…。友奈達と模擬戦をした時以来だな」
今日は眠れるだろうか？考えても仕方ないことなのかもしれないが…――と、扉が軽くノックされる。

「ひなた、か？」
「はい。少し、お話できますか」
「ああ、構わない」
　扉を開けた先にいたのはやはりひなただった。部屋の中へ招き入れ、冷蔵庫からお茶を取り出してお盆に載せて持っていく。
「それで、急にどうしたんだ？」
「…神樹様から神託が降りました。ただ…」
「神託が？」
「はい。どうやら彼らの力の及ぶ先にも神樹様がいるようなのですが、その神樹様からは力を借りることはできないから気をつけるようにとのことだそうで…」
「まあ、未来の神樹様だろうからな。しかし、神樹様も我々のことを気にしてくれているのか」
「…どうなんでしょうか。わかるのは、私達は未来へと行ってしまうと奏さんや零花さんから借りることになる『勇者システム』を使うことになりますから。今までとは勝手が違うのかもしれません」
「なるほど。それは考えていなかったな」
　端末にはアップデートされた勇者システムが入っている。今まで以上の出力が出せるようになっているのは事実だが…。
「今更だな」
「若葉ちゃん？」
「今、ひなたが言ったことだ。私達は未来に行くことは変わらない。であれば、私達にできるのは未来で奏達にどれだけの力になれるかだ」
「…若葉ちゃんは強いですね。私は未来で何ができるかわかりませんし…」
「そういえばそうだな。巫女であるひなたや水都さんは何ができるか、か。その辺りは二人もわかっているはずだが…」
「ですけど、それも今更なのでしょうね。あの二人が私達を連れていくには何かしらの理由がある。そう思っておきましょう」
　お茶を飲みながら若葉は考える。そうだ、確かに奏と零花は『勇者

の力』が必要だとは言っていた。だが『巫女』であるひなたや水都のことはどう考えているのだろうか？
二人には戦う力はない。だが、二人が来ることに止めようとはしていないし、むしろ来てほしいようにも見えた。
（巫女には巫女の『何か』があるということか…？）
今考えたところでわかるわけがない。だが、若葉は隣に座るひなたを見ながら思考を回す。
（わからない。だが、きっと何かある。そう思って行動することにしよう）
――きっと、この意思がひなたを護ることに繋がっている。そんな感覚を若葉は感じていた。

★

―零花ｓｉｄｅ―
――二日後。亀山城の前庭にそれぞれに荷物を持った全員が集まっていた。
「準備できているようだな」
「じゃあ、兄さん、ゼロ。始めようか」
「待て待て待て。前段階の準備くらいはさせろ」
奏は勇者達の周りを囲うように地面に紋様を書き込んでいく。
「何を描いているんだ、奏さん？」
「時空転移はいろいろと問題が多くてな。座標移動とはいえ、俺と零花のように転移位置が思い描いていた時間・場所からずれる可能性がある。俺と零花がずれてもなんとかできる方法はあるが、勇者組がはぐれたら――」
「…怖いことを言うな」
「だから、そうならないようにしておくしかないからな」
「それがこの紋様なのか？」
「ああ。これがあれば少なくとも強い縁で結ばれているもの達をはぐれさせることはなくなる」

紋様を描き終えると奏は手を軽く叩く。叩いた音に呼応するように紋様が輝く。
「これでよし。準備できたぞ、零花」
「よし。じゃあ、始めようゼロ！」
『まったく…。気が急いているぞ、零花』
零花を中心に巨大な魔方陣のようなものが広がっていく。広がりきった魔方陣の周りを奏が神石を一定の間隔で置いていく。
それに対して零花は言葉を紡いでいく。だが、若葉達にはその言葉を理解ができない。否、聞こえてはいるのだ。ただ、言葉として認識ができない。
「なんだ、あれは…」
「ああ、聞き取れないか？なんでも、神代の頃に使われていた言語らしくてな。俺も勉強こそしたが発音が独特なのか言い回しが特殊なのか、俺も何言ってるかまではわからなくてな」
「そうなのか？」
「ああ。まあ、安心してくれ。座標指定だとか総量計算だとかを神様の使う言葉に置き換えているようなものだ」
若葉達に自分が話している詞のことを兄さんが説明しているのが見える。
（さて、未来に行ったらどんな勇者がいるんだろう…。楽しみだなぁ）

――――――――――――

（…ん？）
――…、――…――
『どうした、零花？』
「何か、聞こえる…」
――ゆ…、…――…
『…心を揺らすな、零花！引っ張られるぞ！』
「――貴女は、だれ？」
――勇者は、――…
…――わ、ぎ…――
――…――？・★☆◆◇△○●□

「ノイズが、ひどい…」
ねえ、貴女は、だれ？
△★○□◆
――聞こえない。聞き取れない。
周囲の音が全て遠ざかっていく。だから、聞こえてくる音に向けて手を伸ばす。
「教えて！貴女は――」
――意識が、暗転する。
暗闇の中を落ちていく…。

深く、深く沈んでいく…。

――意識が浮上する。
「――…ん」
目を灼くような明るさに目を眇める。明るさに目が慣れたところで零花は身体を起こす。
「…ゼロ、兄さん…？」

周囲を見渡すが目当ての相手がいない。
「…？歌野、水都？」
いない。居るはずの勇者達の姿も見えない。
「――――っ！兄さん、ゼロ！歌野!!」
そこにいるのは自分だけ。そして、自分の身体を見下ろして気づく。
「…透けてる」
太陽に向けてかざしたはずの掌は太陽を隠すことなく映していた。

☆第一章『乃木若葉は勇者である』（前）★

―ＥＮＤ―

第二章　結城友奈は勇者である
第１６話　引き寄せられた時代

『…やっちゃったかも…』
　零花は途方に暮れていた。
『…どうしよう。どうしたら戻れる…？』
　位相システムの使用中、唐突に『声』が聞こえてきた。本来であれば位相システムの使用中は行きたい時間・場所以外のことを考えるのは大変に危険なのだが、なぜかあの時に聞こえてきた『声』には気になってしまいそちらへと意識を向けてしまった。
　結果は見ての通り。位相システムのバグのような状態で魂だけが別空間に取り残されるハメになった。
『…とにかく！まずはここがどこかを把握しよう。周囲に目立つものはないかなぁ～』
　『魂』とは物理現象や物には基本的に干渉できない。零花は木や電柱をすり抜けながら浮いて移動していると結界に向けて伸びる大型の橋を見つける。
『でっかい橋だなぁ…。橋の名前は…『瀬戸大橋』？』
　どうやら四国から出てはいないことだけはわかる。しかも明け方か、太陽が水平線に見える。
　浮遊しながら近くの街へと移動し、今がいつの時代かを把握する。
『…神世紀２９８年。確か私が向かいたかった時代は神世紀３００年のはずだから…二年前、か』
　二年前…？うーん、未来の情報ってやたらとピンポイントに情報が残ってるわりには他の時間に関しては全然情報が残ってなかったんだよね。
『あっ、でも確か…』
　一人だけ早死にしてる勇者がいた気が…。その時代なのかな？
『とりあえず、どこかしら行ってみないとねぇ…』
　ふわふわ、フラフラ…と浮遊霊のごとく漂いながら移動する。『勇

者』は学生に多いからとりあえず学校を見つけることができればその周辺を張っていれば見つけられる。
そうして浮遊すること数時間。ようやく、それらしき建物が見えてきた。
『《神樹館》…？』
見た目は会館といった方が正しい気はする。しかし、小学生くらいの子ども達が次々と駆けていくことから小学校なのだとわかる。
『このあたりで待つしかないか…。結界が展開されたりしたら一緒に取り込まれると思うんだけどなぁ…』
子ども達が登校し終わったのか、会館の方から鐘が鳴り響く。一人、鐘が鳴り響く中を走っていったようだけど遅刻かな？
――待つこと数十分。空間が揺らぐような感覚とともに景色が一変する。
『――樹海化。やっぱりこの時代にも勇者は居るんだ！』
――なら、私を呼んだ声の主も『勇者』なんだろう。
『とはいえ、勇者はどこかしら？』
高く浮遊してみると最初に見ていた大橋の方へと誰かが跳んでいくのが見えた。いそいでそちらへと意識を向けると風景が一瞬にして大橋へと移り変わる。
『あら、便利！』
切り替わった風景はちょうど『勇者』がバーテックスと接敵するところのようだ。
『あれは…水瓶…だったかな？』
ずんぐりむっくりの身体の両脇に水の珠を従えるバーテックスはゆっくりと橋を進んでいる。どうやらこの時代のバーテックスの侵入路はこの橋しかないらしく、見渡してみても星屑の姿は見えない。
『これなら下にいる勇者達でも問題ないかな』
楽観視していた私の前で始まった戦闘は――連携も何もあったものではなかった。
勢いよく飛び出した赤色の勇者はバーテックスから弾き飛ばされたかと思えば顔に水球をぶつけられ、しかもその水球は頭を覆ったま

まに制止している。
　遅れて駆けてきた紫色の勇者と水色の勇者が攻撃を仕掛けているがバーテックスの表面に小さなキズこそつけるものの、侵攻が遅くなる様子はない。
『…う～、やきもきする～！』
　そばにまで下りて大声をかけてみたが三人そろって私には気がつかない。どうやら今の私には彼女達に干渉する術が無いらしい。
　そうこうしているうちに水球を丸飲みするという荒業を披露した赤色の勇者と、紫色、水色の勇者とともに稚拙ながらも連携？っぽいものでバーテックスを退けた。

☆

　――浮遊霊状態になってから早十数日。
　彼女達についていくつかわかったこと。
　赤色の勇者の名前は三ノ輪（みのわ）　銀（ぎん）。どうやら大層なトラブル体質のようで毎日何かしらのトラブルに巻き込まれている。それでもへこたれないほどのタフネスは有しており、三人の中では先陣を切っていける強さを持つ。
　紫色の勇者の名前は乃木（のぎ）　園子（そのこ）。おそらく若葉さんの直系の子孫。ぼんやりほわほわマイペースを崩さないがここぞという時の閃きには目を見張るものがある。あと、わりと物怖じしない。
　水色の勇者の名前は鷲尾（わしお）　須美（すみ）。実直な性格らしく堅苦しい感じはするがそれ以上に責任感の高い様子が見受けられる。弓という、使いにくい武器でも正確に敵を射抜く腕前には舌を巻くし、他二人の連携を考えて動く立ち回りはさすがの一言。
　私はどうやらこの三人の『誰かの』『どこかの』タイミングの声に呼ばれたらしく、干渉できるのもそのタイミングからだとわかった。
　――なぜわかるか？だって、あの手この手で干渉してみようとしたけど空振りに終わったから。仕方ないからこの子達の日常を眺めながらその時が来るのを待っている状態。

『はやく戻らないといけないんだけど…。兄さん、心配してるよねぇ…』
できるだけ早く追いつくつもりだから、待っていてほしいなぁ…。

★

―ｓｉｄｅ：奏―
神世紀３００年。無事に到着した山岳の中腹で奏達は早速トラブルに見舞われていた。
「奏、まずいぞ！零花さんが目を覚まさない！」
「…なんだって？」
若葉の声に地面に寝かされた零花の様子を探る。
「これは――。ゼロ！」
『…やはり来ておらんか？』
虚空から龍が姿を現す。こちらはため息をついている。
「原因はわかるか？」
『転移の最中、『声』が聞こえるとか言い出してな。そちらへと手を伸ばしておったから魂がそちらへと引かれたのかもしれぬ』
「…返ってこれると思うか？」
『わからぬ。が…、十日以上たっても戻らぬ場合はお主とともに探しに出るしかあるまい』
「そう、だな…」
「奏、零花はどうなってるの？」
不安そうにしている勇者達に現在の状況を簡単に説明する。歌野や水都は顔を青くしているが、こちらがあまりに落ち着いているからか、若葉達はあまり悲壮な感じはなかった。
「そうなると、我々はどうする？」
「ゼロ、ここは神世紀の何月くらいなんだ？」
『少し待て――２月、だな。やはり、こちらも少々引きずられているようだ』
「２月、か。確か、バーテックスの最初の出現時期は…」

『4月の末～5月の頭だったと記憶している』
「なら――拠点の構築と情報収集に専念しよう」
「当てはあるのか？」
「拠点についてはある。情報については…悪いが人海戦術でいくしかない」
「まあ、勇者であるタマ達なら情報収集くらいならできるだろ」
「タマっち先輩ってそういうの苦手そう」
「なっ、杏。おま、言ってはならんことを――！」
「とりあえず、拠点の確保が最優先でいいのね？」
「ああ。こいつ寝かせとかないといけないしな。さて、移動するぞ。零花は――」
「私が背負うわ。みーちゃん、悪いけど私の荷物お願い」
「うっ、うたのんの荷物、なんか重いんだけど…」
「あー、家庭菜園とかできたらいいなぁ、って種とかいろいろ入ってるから」
「私が手分けしよう。ひなた、すまないが刀を預けてもいいか？」
「はい。預かりますね」
「じゃあ、いくぞ～」
　零花を背中に背負い、山を下る。視線をわずかに上に向ける。
（どの時間にほっつき歩いてるかしらんが、とっとと返ってこないと承知しないぞ、バカが…）
　背中に背負う相手に想いを馳せつつも奏は勇者達を引き連れて一路、街へ向けて歩き出す。

第17話　死せることなき命（たましい）

―side：零花―

日々の日常の中では三人は年相応だ。バーテックスとの戦闘は危なっかしくも見えるけれど、そもそもバーテックスと戦うために鍛えていた歌野達と比べるわけにもいかない。

自分や奏も戦闘についてはさんざんに鍛えた側だ。この子達はおそらく『勇者』となってから鍛えている。

『すごく非効率に見えるんだけどなぁ…』

思わず神樹様の方を眺めながらため息が出る。実際、実戦を経るごとに三人は強くなってはきている。だが、それはバーテックス側が未だに連携を取っている気配がないからだ。

西暦の丸亀城戦の時のような連携を図ってくるようになれば、彼女達では抑え切れないのではないか？

『まあ、時代のせいもあるのかも…』

未来でも『勇者システム』をまともに扱えたのは自分と兄の二人だけだった。自衛隊が使えれば今みたいに過去へ力を集めに来る必要もなかっただろうから、このシステムにはいろいろと制約が多いということだろう。

――そして、その時は訪れる…。

三人が樹海化した大橋を陣取って待つ先に見えるのは三体のバーテックス。

当初、三人が連携をもって攻撃することでバーテックスは押されるように後退していた。しかし、無数の針のようなものが他のバーテックスの羽根のような板が弾き、攻撃の方向が定まらなくなったことで状況が一変する。

予測のつかない攻撃に翻弄され、気がつけば三人が同じ場所へと追い込まれていた。そこへ蠍の尾のようなものが一閃。三人が吹き飛ばされた。

『…そんな…。こんなの、この子達だけじゃ…』
乃木園子は意識を失っているのかピクリとも動かない。鷲尾須美も痛みに呻くばかりで立ち上がれそうにない。唯一、三ノ輪銀だけが武器である戦斧を杖に立ち上がる。
「園子、須美っ！」
『…っ、三ノ輪銀、逃げて！』
「――っ！」
雨の如く降りそそぐ矢を避けながら三ノ輪銀は鷲尾須美と乃木園子を抱えて後退する。バーテックスはゆっくりと進む中、三ノ輪銀は橋の袂の陰に二人を寝かせる。
「…あたし一人で、やるしかないか」
銀は立ち上がると須美が薄目を開ける。意識は朦朧としているのか、銀の方こそ向いてはいるが視線が定まっていない。
「ぎ…、ん…」
「…またね」
銀が駆けていくのを見送るように須美は意識を失う。銀はバーテックスを待ち構えるように少し後退した場所で武器を構え直す。
そして、地面に線を引き、その前へ歩み出す。
「ここから先へは絶対に行かせないっ！」
バーテックスへと挑みかかる銀を眺めるしかないのか…。零花は口の端が噛み切れるほどに噛みしめ、歯が鳴る。
『…どうやったら、いいの…』
血だらけになりながらもバーテックスへと立ち向かう銀に、零花は思考する。関わる方法を、自分がここへ呼ばれた理由を、零花にしかできないことを――
自身の身体を見下ろして――思いつく、この世界へと干渉する方法を。
『そうだ。今の私は魂しかない。世界へと干渉するほどの密度が無いのが原因なんだ。だったら――』
零花は一度振り返る。そこに見えるのは――神樹様。
『本当はこんなこと赦されない。けど、私はこのまま指を咥えて見て

いられるほどに冷酷無比でもない――！』
零花は地面へと手を当てる。
『神樹様、貴方は知らないでしょうけど、私は貴方と親和性が著しく高いんだよ！』
結界から零花へと莫大なエネルギーが流れ込んでいく――

★

―ｓｉｄｅ：銀―
何度地面を転がっただろう。身体の痛みなどすでに感じない。手に持つ武器の感触と、見える目だけが未だに私が生きていることを教えてくれる。
バーテックスは未だに三体ともに健在。多少ダメージは与えたがそれでも侵攻が止まる様子はない。
（…まだ。まだ、やれる…！）
最早言葉を紡ぐ余裕などありはしない。全霊をもって立ち向かう以外に銀の中に選択肢はない。
力が入っているのか定かですらない足で、銀は走り出す。叩きつける一撃を跳躍して回避、叩き落とそうとする羽根の攻撃を武器で弾いて方向転換。バーテックスの身体に着地。だが、針が飛んできたことで飛び降りる。
バーテックスの一体にそのまま針が突き刺さることで動きが止まる。
（…よし。同士討ちは狙える！）
再び走り出そうとして――身体が膝から崩れ落ちる。片膝立ちの姿勢のまま、銀は動けなくなった。
（…ヤ、バ…ッ）
――見えたのは、自身へ向かって尻尾が槍のごとく突き出される瞬間。
（…ごめん、須美、園子…。勝てなかった…）
せめて最期まで諦めたくなかった。尻尾が自身を貫く――それを

遮る者が現れなければ。
（――――え？）
そこに立つのは一人の女性。右手一つでバーテックスの尻尾を払い、弾き飛ばした。
『――やっと、干渉できた』
女性はこちらへと振り返ると歩いてきて手を差し伸べる。銀は反射的に手を伸ばしてその手を掴み――身体に何かが流れ込んでいくのを感じて手を引こうとする。
だが、女性は優しげに微笑むとそのまま銀を抱きしめる。
『三ノ輪銀。貴女に力を貸してあげる。せめてこの戦いにだけでも勝利できるように。貴女に悔いが残らないように――』
「あなた、は…？」
『零花。今は、貴女に力を与える者』
目映い光が二人を包み、それを蠍型のバーテックスが光に向かって尻尾を振り下ろす。光から現れた戦斧が尻尾を弾き飛ばし――
「…傷が、治ってる？」
無傷の銀が姿を現した。思わず自身の身体をあちこち見る銀に――
『私が降りたからね。半神状態になったから傷が無くなったように見えてるだけだよ』
「えっ!?頭に声が響く?!」
『驚きすぎ。言ったでしょ。力を与えるって』
「えっ？いや、こんな風って思わなかったし…」
『まあ、今はとやかく言ってる場合じゃない。目の前のあいつらをなんとかしないと』
「…ああ」
銀が見上げる先にはバーテックスが近づいてきていた。
『…銀。貴女はきっと死んでしまうわ』
「うん。わかってる」
『それでも、戦うの？』
「ああ。須美や園子を見捨てるなんてできないから」

『そう。…なら、私が全力でサポートするから、貴女はただ戦いなさい』
「それでどうにかなるの？」
『どうにかするのよ』
「…わかりやすくて、いいな！」
銀が駆け出す。振り下ろされた尻尾を紙一重で避け、尻尾を駆け上がる。そこへ針が降ってきた。
「くっ……！」
『ダメッ!!』
避けようとした銀の身体を零花が無理に尻尾を駆け上がらせる。針は次々と尻尾へと突き刺さるが銀の身体は徐々に加速する。
『飛ぶよっ！』
「えっ？えっ？」
銀の意識とは裏腹に身体は跳躍し針を打ち出していた射手座バーテックスの側面に戦斧を突き刺す。そこに針だらけの尻尾が振るわれるが、戦斧を足場に再び跳躍。
尻尾が叩きつけられてもう一体のバーテックスを巻き込みながら横倒しになるのを確認しながらも残った戦斧を両手で構え直し――
『全力で――』
「――振り下ろす!?」
頭に響く零花の声に合わせて銀が振り下ろした戦斧は尻尾を振り抜いて無防備になっていた蠍座バーテックスへと突き刺さる。さらに力を込めていくとそのまま縦に両断。
バーテックスが光になりながら散っていくのを見送りつつ銀の身体は再び駆け出す。
「スゲー！」
『まだ気を抜くな！あと二体！』
「わかってるっ！」
横倒しから起き上がろうとしているバーテックス二体を見やりながらに銀は三度、その身体を跳躍させる――

★

バーテックスの全てが光となって散っていくのを銀は見送る。
「…へへ…っ、やったね」
『三ノ輪銀…』
「銀で、いいって。ありがとう、零花さん…。力、貸してもらわなかったら…、何もできなかったと思う…」
『ううん。きっと、銀なら一人でもなんとかしたと思うよ。私が、保証する』
「エへへ…。誰かに誉められるって、思ってなかったから…、嬉しいな…」
『ねぇ、銀…』
「なに…？」
『二人とは会えなくなるけど、生きられるなら生きてみない？』
「…できるの、そんなこと」
『うん。銀が、ＯＫしてくれるなら』
「…わかった。私は、ここでリタイアするんだろうけど」
『…ごめんね』
「いいよ。須美と園子を守れた」
誰かが泣く声が聞こえた。
――半透明の零花と銀の振り返った先。戦斧を杖に、仁王立ちした銀の立ち姿を見て、大声を上げて泣く二人の少女の姿が見えた。
その姿を見て、涙を流す銀の横――零花は優しく銀を抱き寄せていた。

第18話　合流

荘厳な建物の中にたくさんの人々が喪服を着て一人の少女を見送りに来ていた。
棺に納められているのは『三ノ輪銀』。勇者として人々のために戦った少女はいま、多くの人々から見送られるところだ。
『なんていうか、自分の御葬式を見てるってスゲー不思議な気分なんだけど…』
『ごめんね。すぐに未来に向かえたらいいんだけど、そう簡単にはいかなくてさ』
『いいって。少し複雑なだけ』
そんな風景を半透明の零花と銀は祭壇近くから見ていた。二人を知覚できる者はいない。
『…銀、辛くない？』
『うーん。多少はね。でも、一番辛いのは須美と園子だよなぁって。私はやりたいように貫いた結果だけど二人は一方的に助けられたあげくに私を死なせちゃったわけでさ…』
『まあ、それは仕方ないよ。銀がしなきゃ、三人そろって死んでただろうし』
『うん。わかってるつもりなんだけど…。だけど――』
銀が見つめる先には銀を想って泣き叫ぶ一人の少年。
『家族のことまで、私は考えてなかったって思い知らされた気分で…』
『ごめん。なんでかはわからないんだけど二人とは離れた位置に移動できなくて…』
『ううん。あれは…、あいつの必死の想いは私が零花さんについていくって決めた以上は背負わなきゃいけない想いだから』
少年を見る銀の瞳は強い輝きを帯びていく。まるで、その『想い』を魂にまで焼きつけるように――
葬式が進んでいく中、一瞬の違和感を感じた。
『なに、今の？』
『須美と園子がいなくなった』

『…ってことはバーテックスが現れたみたいだね。私は銀の存在に引きずられてこの時代に迷い込んでるから、銀が結界内に入れないから入れないのかも』
『須美と園子、大丈夫かな…』
『大丈夫、だと思おうよ。銀が命をかけて守ったんだから』
『うん』
《やれやれ。ようやく見つけることができたぞ》
　聞こえた声の先。零花の隣に龍の姿のゼロが出現した。
『ゼロ！』
『…だれ？』
『…ふむ。勇者の魂とはなかなか稀有な存在よな。して、零花。お前は何をバカなことをしたと思っている』
『ごめんね？でも、銀が仲間になってくれたんだよ！』
『そういう問題ではない』
　ゼロに噛みつかれて頬を引き伸ばされ、悲鳴をあげる零花を見て銀は笑う。そんな銀をゼロは真正面から見る。
『お初に御目にかけよう。我はゼロ。零花の二心同体の神様と言っておこう』
『三ノ輪銀です。よろしくお願いします』
『かしこまらんでもよい。お主の話しやすい話し方で話してくれた方が我としても気を使わんですむ』
『いいん…んんっ、いいの？』
『構わぬ。銀には助力を乞う側ゆえな』
『わかった。ゼロ』
『うむ、それでいい。して、零花。未来に案内するが大丈夫か？』
　零花は噛みつかれていた頬を撫でながら――
『いいけど、よく捕捉できたね？』
『急に接続できるようになったので来ただけだ。おそらくではあるがお前を引き寄せた――なるほど。この勇者が原因か』
『そうだね。ところで、未来に行ってる人達はどんな感じ？』
『とりあえず情報収集しておる。そもそも勇者の出現時期とは少しズ

レが生じた。原因はお主だろうが…』
『えっ…。帰ったら怒られるかな？』
『素直に怒られろ。お前は気ままに動きすぎる』
『それで、あとはどうするの？』
『とりあえず須美と園子のその後をそれなりに見て行くくらいかな』
数日、零花と銀とゼロは須美と園子を見ていた。
勇者として強くなろうとする二人に銀は聞こえないとわかっていながらも応援に精を出している。
『そういえば、この二人って未来にいるのかな？』
『どうであろうか。噂ですら聞かなかったところを考えるに未来には二人は勇者をしておらぬ可能性はあるぞ』
『えっ、それ本当？』
『うむ。とはいえ、ここと未来では四国内というところは一緒ではあるが座標がズレている。場所がズレているから話を聞かんだけかもしれんな』
『そっか…』
『――さて、ではそろそろ向かうぞ。銀、零花』
『うん。いくよ、銀』
『わかった！』
ゼロを中心に光が集まる。途端に身体が浮遊感に包まれる。
『――またね』
光の中、銀は家族を最後まで見つめていた――

★

――目を開けると見たことのない天井が見えた。
身体を起こして伸びをすると長い間眠っていたのがわかる。バキバキボキボキと鳴ってはいけないレベルで身体が軋む。
「――っ、はぁ。生身はやっぱり落ち着くねぇ」
「よう、バカ妹」
声が聞こえた方を見ると襖を開け放ち、目だけ笑っていない奏が

立っていた。
「おはよう、兄さん！」
「おう。1ヶ月も身体ほっぽりだしてどこほっつき歩いてやがった、ああん!?」
「ぎゃあああぁぁ?!」
――げんこつ一発。
先ほどの身体が軋むような音とは違う快音を響かせて零花は再び布団に倒れる。
「――はあぁぁ。すっきりした！」
「『すっきりした！』じゃないよ！少しは加減してよ！」
「うるせぇよ。いきなり魂だけ行方不明になりやがって」
「ごめんね？」
「もう一発いくか？」
「なんだ。ようやく目を覚ましたのか」
襖の向こうからゼロを伴って若葉が御膳を持ってきた。
「一時はどうなるかと思ったが問題なく解決したようでなによりだな」
「ご迷惑をおかけしました」
『腹が減っておるはずだ。杏が飯を用意してくれておったから食べておけ』
御膳に載った和食に手を合わせて食べ始める。
「あっ、そういえば銀は大丈夫かな？」
『今しばらくは我の中で魂を保管している。そのまま放置していては劣化してしまいかねんし最悪霧散して天の階段を上がってしまいかねん』
「銀って誰だ？」
「三ノ輪銀って名前で、私が魂だけで行ってた時代の勇者の一人。肉体は葬式で火葬されちゃったから魂だけでついてきてくれたの」
「ふーん。そこまで稀有な勇者もいるんだな」
「新しい勇者の話か？」
「うん。肉体を得たら若葉も仲良くしてあげてね！」

「ああ、それは任せておいてくれ」
「ところで兄さん。他のみんなは？」
「今は情報収集の最中だ」
『何か新しい情報でも得たか？』
　奏は腕を組むと唸る。隣にいる若葉も眉間にシワを寄せて悩ましげな顔。
「正直なところ手詰まりに近い。この時代は若葉達が居た時代ほど大赦は勇者の存在を喧伝していないみたいでな」
「ただ、歴史的には勇者がバーテックスと戦っている事実はあるようだ。しかし、勇者の存在については大赦が秘匿でもしているのか一般市民レベルにはほとんど下りてきていない」
「そっか。銀の死のこともあっただろうし勇者に関する情報については詳しく知らさないようになっちゃったのかもね」
『とりあえず我は早急に三ノ輪銀の肉体を製作ののちに零花へと戻ろう。いつまでも離れておるわけにもいくまい』
「そうだね。お願いね、ゼロ」
　あっという間に御膳の分を平らげた零花は立ち上がり伸びをする。
「あ～、やっぱり身体ガタガタだ～。しばらくはリハビリだなぁ」
「だったら、お前。銀ってやつの身体が出来上がったらでいいから大赦に探りを入れてきてくれないか？」
「大赦の本山はわかるの？」
「さすがにそこまでは秘匿されてなかったからな。それに、少し気になることもある」
「気になること？」
「ああ。今後の俺達にも関わりそうなことだ」

☆

　そこは荘厳な建物の中。大赦に連なるとある建物の廊下をその男はスルメをくわえながら書類を見て歩いている。
「やっぱり早い目に準備しとくに越したことなさそうだよなぁ」

「ここに居ましたか」
　書類から視線を上げた先には一人の神官が立っていた。男はスルメを手に取り、笑みを浮かべた。
「意外だな。たいていの神官は俺のところには顔を出そうともしないってのに」
「そうですね。貴方が最古の神の直系と聞きましたがそのような雰囲気が無いからでしょう」
「言われちまったな。そこまでまっすぐ言ってくるやつの方が珍しいがな」
「貴方の研究はどうですか」
　神官の問いに男は楽しそうに笑う。
「ああ、もうすぐ試作機ができあがる。だが、誰に預けるかは決まってないがな」
「それでしたら、私が推薦させていただいても？」
「へえ、意外だな？あんたらにとって俺の研究は卑下するものと聞いていたが」
「そうですね。しかし、有用であることは確かです。力をお貸しください」
「いいぜ。ただ、せめて一度は顔を拝ませろよ。これからは『共犯役』なんだしよ？」
「――わかりました」
　神官が仮面を外す。その顔を見て、男は笑みを深めた。
「ああ、なるほどな。あんたなら納得だ」
「そうですか」
「ああ。今日からよろしく頼むぜ安芸」
「そちらこそ、頼みますよ御剣（みつるぎ）　葵（あおい）」